求道

第六卷

第五號

(毎月一回一日發行)
(毎月一回一日發行)

求道第六卷第五號目次

◎誓の力　求道　自督
◎信樂開發と罪惡の自覺　講話
◎矜哀の善巧　聖傳　近角常觀
◎念佛成佛是眞宗
◎チヤータカ釋尊傳
第二十三　惡しき友は善行を壞す
第二十四　象と犬の話　告白　能戸得一
◎一々皆善巧　小野島覺哲
◎慶讃　近角常觀
◎十七憲法　第二條　紹介
◎學修法◎信仰五部書　時報
◎求道講話の近況◎清澤師七回忌◎夏期傳道日割

講話

毎日曜午前九時
求道學舍
《本郷森川町一番地》

毎土曜午後二時
第二求道會
《九段坂佛教倶樂部》

毎月二日午後七時
第三求道會
《日本橋蠣殼町説教所》

求道　第六卷　第五號

誓の力

吾人獲信の一念、佛は御慈悲の塊にてましますことを認め得たり、是我認めたるにあらず攝取の心光の我を攝取したまへるにてありき、此に於てや盡十方無碍の光明の如來にてましますこと明らかに知られたり、既に如來に接し奉るや、如來の御名は自から口に溢れ來りて、念佛稱名の貴きを味ひたてまつる、此念佛や固より自心の發起する所にあらず、全く如來の御名を成就して召喚したまふ本願の淵源より流れ來るもの、此に於てや選擇本願の正意、我等罪業深重のものを救はんがためなること明らか也、回顧し來れば御慈悲といひ光明といひ、名號といひ、何れも如來の御惠に外ならずと雖、本願と頂くに至りて大悲大願の慈親に見えたてまつる心地す也、聖人は如來選擇の願心と宣ひ、如來淸淨願心と宣ふ、吾人本願ときかば、汝一心正念にして直に來れと宣へる御呼聲は、はや我等が胸に響く也、弘願といひ、願心といひ、願意といひ、願力といひ、何れも大悲の矜哀の御心の身に溢るゝを覺ゆる也、されど誓の一字を味ひ奉るに至りて初めて其本願のます〳〵力强きを感じ、罪深き程ます〳〵救の御手のいよ〳〵深廣にてましますを頂きたてまつる也。

嗚呼尊むべき哉、御誓、如來の本願は、單に御心の發表にあらず、單に希望の宣言にもあらず、若し我佛を得たらんに十方の衆生、殊に罪惡深重、煩惱熾盛の衆生を救濟せずんば我正覺を取らじといへる誓の願也、佛の正覺は救濟の爲也、如來の來生は引攝の爲也、我等が罪深きだけます〳〵救の誓は我等を放ちたまはざる也、我等が如來に遠かるだけ濟の誓は益々我等を追ひかけたまふ也、天は落ちんとも、地は裂けんとも如來の誓は動くべからず、我等の空しく地獄に落ちんときは如來の誓の破れたる時也、如來の正覺の碎けたるとき也、慧信尼公遺狀に曰く、誠に凡夫の習なれば憂事多く候べし、かゝる身なればこそ諸の佛にも見放され候ひしを彌陀佛の救ひたまはんとて此身一人の往生をかけものになされ、正覺ならせたまへば、如來の御姿こそ我等が往生の疑なき證にておはしまし候へば、必ず〳〵御過あるまじく候と、嗚呼仰げば

彌高き御誓なる哉、嗚呼、鑽れば彌堅き誓の力なる哉。

『此身一人の往生をかけものになされ正覺ならせたまへば、如來の御姿こそ我等が往生の疑なき證にておはしまし候』とは、全く聖人が『彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人が爲なりけり、されば、そくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ』と宣ふと符節を合せたるが如し、何れも自己一人の爲の五劫思惟也、正覺成就也、抑々何の爲に一如法界の都より法藏菩薩とあらはれたまひしか、何の思召ありて法性法身より方便法身の御姿を現したまひしか、無明の大夜をあはれみて、法身の光輪きはもなく、無碍光佛としめしてぞ、安養界に影現する、盡十方無碍光佛の御姿は我等無始已來の無明の闇を破り、三毒の夢を覺さんが爲めにあらずや、抑々本覺明朗の境界より我等迷妄の凡愚を憐愍したまふ大悲大慈は凝りかたまりて五劫の思惟となり、超世の大願となれり、しかも其大願たるや、若し逆惡迷妄の衆生を救濟するにあらずんは如來として出現すまじとの誓也、其誓の下に永劫の修行も成就し、無量壽無量光の如來として今現に在す也、法然上人聖人へ附屬の文に曰く、彼佛今現に成佛したまふ、當に知るべし、本誓重願空しからず、衆生稱念して必らず往生を得べしと、嗚呼此の誓の力は如來の成佛によりて全く成就して、極力張れる弓の如く一念一時も矜哀の御心は張りつめて日夜休む時あることなし、何人か此の誓を虛くするを得べき、各一人が爲なりけり、本願力に遇ひぬれは、空しく過ぐるひとそなき、是誓の御心の一人一人を見逃したまはざれば也、嗚呼誓の力の偉大なる哉、此誓の下に名號も成就したまへり、此誓も下に如來の御姿も成就したまへり、此誓の下に極樂國土の成就したまへり、何事も唯我等を往生せしめんが爲なりけり、安心決定鈔に曰く、念佛の行者名號をきかばあは、はや、わか往生は成就しにけり、十方衆生往生成就せずば正覺とらじとちかひたまひし法藏菩薩の果名なるかゆへにとおもふべし、また彌陀佛の形像をおかみたてまつらは、あは、はや、往生は成就しにけり、十方衆生往生成就せずは正覺とらじとちかひたまひし法藏薩埵の成正覺の御すかたなるゆへにとおもふへし、また極樂といふ名をきかは、あは、はや、わか往生すへきところを成就したまひにけり、衆生往生せずは正覺とらじとちかひたまひし法藏比丘の成就したまへる極樂よとおもふべしと。

噫、信じ易き御佛なるかな、得易き往生なるかな、然れども其得安き所以、信じ安き所以のものは、かくの如き力强き誓の力あれば也、若しこの誓の力を蒙らずは何ぞかく安々と信じたてまつるを得べき、若し大悲切々の誓を仰がずして徒らに我往生は成就しにけりとおもふのみならば是主觀上の摹想のみ、自設の空想のみ、安心決定鈔を拜讀すべきものゝ心すべき點此に在り、此誓の力を仰ぎたてまつらは、如何に頑冥なる石の如く、岩の如き罪惡の塊も救の矢の貫かざることのあるべき、他力の易きは偶然に易きにあらず、往生の易きは法爾として易きにあらす、誓の弓强く張りて決して虛しからざれば也、衆生稱念必得往生の容易なるは當知本誓重願不虛の絕對力ましませば也、此御誓が我等胸に屆きたる時名號も我一人が爲なりけり、如來の御姿も我一人が爲なりけり、極樂淨土も我一人がためなりけりと、唯本弘誓願を仰ぎたてまつるの外なき也。

すべて他力の安々と頂かるゝ下には必ず此誓の力の牽く所たることを忘るべからず、而して吾人は自然法爾法語に於て洵に其極をいたゞきたてまつる、自然といひ、法爾といひ何ぞ其容易なる、水の下に下り、烟の上に上るが如し、若し自然法爾を誤りて、柳の自然に綠に、花の法爾に紅なるが如き意味に味ふが如き者あらんが、自然法爾の眼目を知らざる也、石の下に下る、如何にも自然也、爾れども地球の引力の之を牽けば也、雲の上に上る、いかにも法爾也、爾れども大氣之を推し上ぐれば也、罪業深重の我等地獄に落ちずして淨土に往生するは無窮の願力ましませば也、自然法爾法語の眼目はちかひの一語也、全龍の活躍する點睛也曰く、自然といふは自はおのづからといふ、行者のはからひにあらず、しからしむといふことはなり、然といふは、しからしむといふことは、行者のはからひにあらず、如來のちかひにてあるかゆへに、法爾といふは、如來の御ちかひなるがゆへにしからしむるを法爾といふ、この法爾は御ちかひなりけるゆへにすべて行者のはからひなきをもちてこのゆへに、他力には義なきを義とすとしるべきなり、自然といふは、もとよりしからしむるといふことはなり、彌陀佛の御ちかひのもとより行者のはからひにあらずして、南無阿彌陀佛とたのませたまひて、むかへんとはからはせたまひたるによりて、行者のよからんとも、あしからんともおもはぬを自然とはまふすぞときゝてさふらふ、ちかひのやうは無上佛にならしめんとちかひたまへるな

りと云云、此ちかひの文字如何に千萬鈞の力なるかな、此御誓あるがゆへに、おのづからしからしむる也、此御誓のはからひあるがゆへに行者のはからひなからしむる也、此誓あるがゆへに南無阿彌陀佛とたのませたまへる也、此誓あるがゆへに行者のよからんともあしからんともおもはぬ也、此誓あるがゆへに、我等煩惱具足の凡夫をして無上佛の證を開かしめたまふ也、自然法爾の尊きは大悲無限の矜哀の御誓ましませば也、嗚呼極りなき誓なる哉、底しれぬ誓なる哉、如來の智惠海は深廣にして涯底なし、噫誓願不思議なる哉、佛智不思議なる哉。

縱令一生造惡の、　衆生引接のためにとて、
稱我名字と願じつゝ、　若不生者とちかひたり。

自督

信樂開發と罪惡の自覺

○御慈悲が屆いて下さた一念に、アゝ今迄御慈悲の御惠を蒙りながら、夫を喜ばずに、徒に世を怨み、人を不足に思ふたことは、こと〳〵く間違てあつたと、いかにも我身の罪惡の深きことが自覺されて全く頭が下る樣になる、これが初めて我身の惡いことが知れたのである。

○此我身の惡いことが知れたは何故かと云へば其樣な惡いものを見捨てず、其樣なものゝために今日まで呼びづめ、待ちづめにして下さつた親の御心をきゝて、ます〳〵我身の濟まなんだことが分つたのである。

○親の心をきかぬまでに隨分自己の罪惡を苦にして惱むことがあるが、夫は罪惡の自覺ではない、寧ろ罪惡の爲に煩悶しつゝあるのである、即ちどうかして罪惡をなくしたいものじやといふて、出來ぬことをしたい〳〵いふて居るのである、つまり自分はよくなりたいのであるが、罪惡からのがれたい

〳〵と云ふて居るのである、善くなりたい〳〵と企てゝ居るのである、罪惡の塊の身でありながら一とかど、善くなれるつもりて自惚て居るのである、夫故かくの如き狀態にあるときは決して罪惡を自覺したとは云へぬのである。

○勿論罪惡に惱むのであるからたしかに一方では我は何故に此樣に罪が深いのであろうといふときは、如何にも我身は現に是れ罪惡生死の凡夫と思はれた樣に見えるが實は決してさうではない、一方では我は何故に此樣に惡い心が起るであろうと自ら責めつゝある他の一方には、しかし他の人間とても矢張同等であるとかいふ樣に、チャンと自ら怨して居るのである、丁度水の中で板の一方を押べると他の一方が浮て居るのと同樣である。

○實は他人が目についたり、自分は惡いが善いところもあると思ふのは眞に親の惠みの分つたのではない、たとへば自分が惡いことをして心に大に不安であつて、先づ夫を親に隱して居るといふ場合には實に親にすまぬ、ドーして自分の罪惡を消さんかと苦心するのである、いかにすまぬ〳〵と考へても、罪惡を消さんとするも消せるものではない、そこで夫を親に打開けて、定めて親は許さぬであろうといふ時、親は夫を聞きてなるほど夫は惡い、惡いことは惡いが、惡いことをするといふは、さて〳〵可愛想なことである、いかに惡くとも我は決して汝を見捨てぬぞよと親から聞きたるときの感想は如何であろう、如何にも惡かつた、いかにも〳〵此の如き惡きものを見捨て下さらぬ御心か難有いと感謝する。

○其如何にも惡かつた、實に惡い我身であると自分の價値の知れたところが罪惡の自覺である、此親の許を得たから一時に罪惡が消えたといふのではない、是其罪惡のものを見捨てたまはぬ惠が見えたから唯我身が惡いと知れたのである、そして罪惡を自覺してみれば罪惡が氣に掛からなくなつたのである、其罪惡が心配にならなくなつたのである。

○たとへて見れば我等は紛失物をしたとき、他人を疑つたり、自分の周圍にないと思ふて居る場合に、他人來りて、たしかに其周圍にあるといふ、夫が一人ばかりではない、皆の人が、かく言ふとせよ、人皆かく言ふ己上は心中紛失したとは思ひつゝも、人の言に從順に、如何にもありました、ありまするといふて見ても、心中頗る安からざるものがある、何んとなれば自分の考を善いと思ふて居るからである、しかるに後に果して實際其紛失物を自己の周圍に發見したりとせよ、其人

の心中に、これは〳〵全く我が惡かつた、誤てあつた、今迄他人の親切の言を入れざるのみならず、人を疑ふに至りしといふことは、よく〳〵自分は相濟まぬことを爲した、かく自分が惡かつたと中心から頭が下つて、一點も自分の恃むへき點を見出さない、是が自己の誤を自覺したのである、しかも頭を下げながら中心頗る安泰である、前に心中自分の思を固守して、人を不足に思ふて居つたよりは頭を下げながら樂てある。

○罪惡を自覺するといふは、かくの如く實際自己の罪惡が分かたのである、佛は罪惡のものを救ふといふ御慈悲によりて、我等が罪惡を自覺さして下さつたのである、しかも自覺して樂である、そして自覺さして下さつたは慈悲の御力なれど、罪惡は飽迄我身の罪惡である。

○偖此罪惡を自覺せしむるためには種々に善巧方便して下さる御手廻はあるけれども罪惡は飽迄我身の持物である。其罪惡のものを助けんとの慈悲と、夫を知らするために色々の御手廻はしをして下さるが大悲の惠である。

○しかるに動もすれば罪惡其物までを大悲の御惠とか、御方便とか、佛が爲さしめたまふものゝ樣に云ふのは皆誤である。

○若し罪惡が佛の催てあるならば罪惡深重煩惱熾盛の衆生を助けんとの本願は無意味である、我等が罪業深重なればこそ佛は大悲の本願を立てたまふたのである、罪惡が如來の御惠であるならば、抑々佛が惡を助けんが爲に願をたてたまふ筈がない。又罪惡を自覺するといふこともあり能はぬことになる、抑々本來罪惡の塊である、夫を救ふために佛の本願があらはれ、其願心を屆けるために善巧方便が働いて下さるのである。

○信樂開發の一念、眞に罪惡の自覺を生したるときは、佛はかくの如き罪惡の塊の我かために御苦勞をなし、又之を知らせるため色々御方便下さつたことゝ感謝するのである。歎異鈔に「我等が身の罪惡のふかさをもしらず、如來の御恩の高きをもしらずして迷へるを思ひしらせんがためにて候ひけり」と信の一念にそくばくの業をもちける身にてありけるをと分つたのである、出離の緣あることなき身と知れたのである、このいかにもどつさり落ちられた落ち心が罪惡の自覺である、機の深信である。

矜哀の善巧

○信樂開發して、自己の罪惡を自覺し、如來の御慈悲が分かりて見れば、さて今迄の境遇も人生の出來事も、畢竟此信心を發起するための善巧方便であつたと知ることが出來るのである。

○逆緣の恩寵といふことをいふたが、即ち色々の逆緣が御慈悲をしらして下さる御手引となるのである、又御慈悲を相續して喜ばして貰ふ御緣となるのである、しかし何故逆緣が恩寵であるかといへば、如來の御慈悲を喜ばせるための恩寵である、若しこの御慈悲を頂く一念なかりせば、如何に逆緣を恩寵と思ふても中心より感謝することは出來ぬであろう。

○王舍城の悲劇に對して、聖人が、大聖權化の善巧であると喜びたまひしも、畢竟自分の如き逆惡のものを救濟したまふ如來の誓願に自分を方便引入せんがために御苦勞下された大聖矜哀の善巧であると御喜びなされたのである。

○是は我々の立場から頂くときは阿闍世も提婆も皆我等がために御苦勞下された御惠であるといふことである、而して之を人生一般の出來事の上にまで同樣に味ふべきことであると氣がついて來たのは、阿闍世王が苦悶の狀態を一讀して、如何にも自分の苦しみた境遇と少しも變らぬと氣附きたる時である、此時は提婆といふも阿闍世といふも畢竟此罪惡の私をしらして下さつたのであると氣附きたのである。

○其罪惡の我をすて玉はぬ如來の御慈悲を頂いて見せて下さつたのである、そこで私かに案ずるに聖人が此阿闍世王の苦悶の前に誠に知りぬ悲哉愚禿鸞愛慾の廣海に沈沒し、生死の大海に迷惑し云云の御悲歎の文のあるも畢竟聖人御自身の實驗か此阿闍世王同樣であるとの告白であろうと氣が付いた。

○しかし自己の罪惡は阿闍世王同樣であるが、大聖の權化がかく罪惡の我と同樣の境遇に苦勞をして見せて私のために此御慈悲をしらして下さるのであるから、私こそは久遠已來愛慾に沈沒し、名利に迷惑する罪惡のものであるが、夫を引き上げるために大權の聖者が阿闍世王、提婆となつてあらはれて下さつたのであるとの感謝である。

○此阿闍世王同樣の境遇にありて、此逆惡もらさぬ誓願に方便引入して下さつたのは、いかにも大聖矜哀の善巧である、昔の阿闍世王の時ばかりではない、即今同樣の境遇も同じく淨土の機緣熟して下さつたのである。

○阿闍世王を自分の事と思ふて其同樣の境遇を大聖矜哀の善巧なりと感謝したが、自己自身はます〳〵罪惡に沈沒する逆惡のものであると自覺さして貰ひ、益〻慚愧懺悔さして貰ふたのである、罪惡其物はいかにもしぶとい我身であるが、其者を飽迄見捨てたまはぬ御慈悲が難有いのである。

○人間といふものは恥かしいことには實際かくの如き逆境にあるときは自分の罪業や愛慾名利までも如來の御しまはしの樣に言ひたい心持のあるものである、しかし、其境遇も其周圍も、同情の聲も、友情の聲も、皆我如きものゝために下したまはる恩寵であるとは思ふが、我罪業や、煩惱はいかにしても佛の御しまはしとは思ふことは出來ぬ、恩寵を以て包まれて居る我はます〳〵愛慾名利の淺間しき我である。

○唯一つ何より難有いことは夫程の罪業の我をよくも〳〵見捨てたまはぬことである、近頃頻りに氣がつきて來たのは業報といふことである、聖人は常に業を懺悔して見せて下さる、そくばくの業をもちける身にてありけるをとか、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はよろづのことみなもてそらごと、たはごと、まことあることなきとか、よきこゝろのおこるも善業の催すゆへなり、惡事のおもはれせらるゝも惡業のはからふゆへなり、さるべき業緣の催せはいかなるふるまひをもすべしなど、如何にも罪業深重に繫縛せられたる我等なることをしらして下されたのである。

○而して其業報を自分で變ぜんとするも一歩も變ずることは出來ぬのである、しかるに無得の一道は其罪惡も業報も感ずることあたはず、其業をもちける身をたすけんとおぼしたちける本願である、其惡業煩惱そらごとたはごとの中に念佛ばかりまことである。

○平素言ふべきことてはなけれども、眞面目に氣付くべきことであるから一言するに、聖人が六角堂の靈告にも行者宿報設女犯と仰せられてある、行者若し宿報にして家庭世俗の生活をするならばと仰せられてある、佛弟子としては淸淨持戒たるべき筈なれど、行者若宿報にして在俗無戒の生活を爲すならばとある、是れ我か宿報であると聖人が非僧非俗愚禿と卑謙したまひ、愛慾名利に沈沒迷惑すと悲歎述懷したまひたる所以である、其宿報につきそひて、一生之間能莊嚴の大悲善巧の恩寵を感謝したまひた次第である。

○聖人の御一生が、いかにも謙虛にして恐くば世界の各宗敎間に比類なき態度のあらはるゝも畢竟此そくばくの業をもちける身にてありけるをとの一語より湧き出づる涙からである、賢者の信をきゝて愚禿の心を顯はす、賢者の信は內は賢にして外は愚なり、愚禿の心は內は愚にして外は賢なり、ア、皆是れ我御身にひきかけて私のことを知らして下さるのである、此點に至りては、釋尊がましましても、法然上人がましましても、親鸞聖人ましまさずは、此等罪業の凡愚には迚も出離の道を得ることは出來ぬてあつた、眞宗末代の明師と鑽仰するの外はない。南無阿彌陀佛。

かけひきごゝろ

楠　秀　丸

かけひきごゝろと云へば、何だか商法家の口吻を眞似た樣でいやらしく耳に響きますが、決してそうてはない。今の社會政治家敎育家實業家宗敎家何れの方面を解剖してみても多少この分子が含まれて居るかの樣に見えます。啻に含まれて居ると云位てない。時によるとこの心の强弱が敏腕とか活動とか云ふことを判する唯一條件の如く思はれて居ることもあります。一體かけひきと云は一人て出來るものてはないので、少くとも二人以上二物相互の間に行はれるので、所謂國と國との間の交際、人と人との間の交りなどに於て、筐てあるとか口てするとか目てするとか、何かにより冥々に行はれて行くのてあります。魚心あれば水心ありといへば、一寸聞くと如何にも道德化してよく聞えますが、反面より見れば魚心なければ水心なしと云一種のかけひきを含んだ水くさい意味が見えまして、これを口に移すと賣り言に買ひ言となつて惡く響き來るのてあります。

そんならかけひき心と云はどんな心の狀態であるかと云に善ても惡ても相互の心に解決せられぬ時て、云はゞ甲と乙との間に互に不安の念がありて衝突するので、チョード目カクシをして物を探る如く、盲目同士のさぐりあひなのてあります。てすから、かけひきこゝろの裡面には、いつも不安の念が伴ふのてあります。人間て一番かけひき心のないものと云へば、誰しも眞實の親子と云てありましようが、其親子の間てさへも時によるとこれだけ苦勞をすれば、子孫が少しは自分の事を忘れはせまひかと、親の心子知らずて困るとか其他家庭上にて存外其心があらはれて來るのてあります。てあるから緻密に考へると、凡て人間には程度の差こそあれ、かけひきこゝろのないものは先づ無いと云て宜敷かろうと思はれます《精神界》

講話

念佛成佛是眞宗

《求道學舍日曜講話》

近角常觀

上

念佛の事に就きましては、昨年以來度々法然聖人の選擇本願念佛の御眞意を繰返し〳〵お話致した事でありますが、此頃になつて又一層深く此の念佛の貴い事を知らせて頂きましたから、今日は『念佛成佛是眞宗』といふ適切な有り難きお言葉に就いて喜ばせて頂き度いと思ふのであります。

兎角念佛と申しますと、法然聖人の御敎化は念佛を勸め給ふ御敎化である。夫故南無阿彌陀佛々々々と念佛を稱へるのが法然聖人一代の御敎化である。其處で其念佛は唯稱へる念佛では無い、彌陀の本願を信じて稱へる念佛であると、信の方に力を入れてお勸め下されたのが親鸞聖人一代御敎化の骨目である。夫で之を一言に言ふと、法然聖人は所謂念佛爲本の御敎化である。親鸞聖人は信心爲本の御敎化であると昔より言ひ來りて、念佛と言へば法然聖人、信心と言へば親鸞聖人と、直ぐ斯く考へるやうになつて居るのであります。成程之に間違ひは無く、又親鸞聖人の仰せられる信心が、念佛を離れた信心だとは誰も考へる者は無いが、去りながら眞宗と言へば直ぐ信心が根本であると考へるもの故、つひ不知不識の間に念佛を疎く思ふやうになつて來るのである。然るに親鸞聖人が淨土眞宗と名けられた眞宗といふ名は何から來たかと言ふに、實に今いふ「念佛成佛是眞宗」といふ語が其の根底になつて居るのであります。して見ると眞宗の肝要は信心に違はぬが、其の信心は念佛と別物では無い。念佛成佛是眞宗といふ所が實に眞宗の眞宗たる所である。私は斯く氣が附いて、從來とても念佛の尊い事は常に申して居つたのでありますが、特に今日は此のお言葉を題としたのであります。

念佛成佛是眞宗とは何うかと言ふに、第一此の言葉の上に言ふに言はれぬ有難い味ひが顯はれてあるのである。念佛成佛是眞宗とは之を一言に申せば、即ち南無阿彌陀佛々々々と念佛を稱へて佛にして貰ふのが眞宗であるといふ意味である。稱へ易く保ち易き念佛を唯何事もなく南無阿彌陀佛々々々と稱へて淨土に參つて佛に仕て貰ふ、之が念佛成佛是眞宗であると頂くと、此のお言葉は言ふに言はれず有難い。實は前號の『歎異鈔』の講義を書きつゝ氣附いたのでありますが、『歎異鈔』の第拾二章に

經釋をよみ學せざるともがら往生不定のよしのこと、この條すこぶる不足言の義といひつべし、他力眞實のむねをあかせるもろ〳〵の聖敎は、本願を信じ念佛をまうせば佛になる、そのほかなにの學問かは往生の要なるべきや。云云。

といふ御言葉がある。前號の講義中にも書いて置いたのでありますが、「他力眞實のむねをあかせるもろ〳〵の聖敎は、本願を信じ念佛をまうせば佛になる」とは、たつた一言なれど

も如何にも尊い御敎化である。他力眞實の旨をあかせる諸の聖敎とは、言ふ迄もなく佛の廣大なる眞のまことを顯はし下された御聖敎である。其の他力眞實の旨をあかせる聖敎は、「本願を信じ念佛を申せば佛に成る」といふより外に何物も無い。此の「本願を信じ念佛を申せば佛に成る」といふ御言葉を熟々味ふて來ると、即ち今の念佛成佛是眞宗といふのと同じ味ひになつて來るのである。即ち他力眞實の旨をあかせる聖敎とは、念佛成佛の眞宗が是であるといふ事になるのであります。「本願を信じ念佛を申せば佛になる」――實に是程易す〳〵とした敎へは無い。彌陀の本願を信じ本願の仰せ通りに南無阿彌陀佛を稱ふる者は佛になつて仕舞ふといふのである。念佛成佛是眞宗といふ味ひが、實に能く此の一語の上に現はれてあると思ふのであります。眞宗の敎化といふも、畢竟するに此の外には無い。法然聖人一代の御敎化も此の一語に盡きるのであります。親鸞聖人は『和讃』に宣はく。

本師源空世にいで、　弘願の一乘ひろめつゝ、
日本一州こと〳〵く、　淨土の機緣あらはれぬ。
智慧光のちからより、　本師源空あらはれて、
淨土眞宗をひらきつゝ、　選擇本願のべたまふ。

法然聖人が淨土眞宗をお開き下されたと言ふと、法然聖人の何處かに眞宗といふ言葉があるかといふ事になるが、然うでは無い。法然聖人の御敎化には直接眞宗といふ言葉は無けれども、親鸞聖人の御意にして見れば、法然聖人の御一代は他力本願眞實の旨を說き明して下されたに外ならぬのである。智慧光の力より大勢至菩薩の化身として此の土に來現して、智慧の念佛を授けて衆生を淨土に運れ込んで下されたのが實に法然聖人一代化導の御眞意である。して見れば聖人の一代は念佛成佛是眞宗の本旨をお知らせ下されたに外ならぬといふのが親鸞聖人の御信念であります。

又度々繰返す事であるが、其の法然聖人一代の念佛成佛是眞宗の御敎化が、即ち親鸞聖人の敎行信證の御敎化であります。今のお言葉に「他力眞實の旨をあかせる聖敎」とある。此の「あかす」の文字が『敎行信證』に在りては、顯淨土眞實敎、行、信、證、眞佛土 化身土、といふ具合に、丁度顯の字になりて現はれて居るのであります。斯くの如く、六軸皆淨土の眞實を顯はすとあるが、即ち他力眞實の旨をあかすと仰せられた思召である。勿論『歎異鈔』に「他力眞實の旨をあかせる聖敎」と仰せられたは、唯單に『敎行信證』を指されたものでは無い。總ての淨土の聖敎が他力眞實の旨をあかせるものなる事を仰せられたのであるが、丁度偶然にも顯淨土眞實敎、行、信、證、の顯の字が「あかす」の文字に當るのであります。其の「他力眞實の旨をあかせる聖敎は、本願を信じ念佛を申せば佛になる」て、『敎行信證』一部の內容と言はうか、一部の精神は外ては無い。「本願を信じ念佛を申せば佛になる」といふ一語に皆な盡きて仕舞ふのである。敎行信證といふ言葉迄が此の一語の中に皆な備はつてあるのであります。夫は何うかといふに『敎卷』には

夫れ眞實の敎を顯さば、則ち大無量壽經是なり。斯の經の大意は彌陀誓を超發して廣く法藏を開いて凡小を哀みて選んで功德の寶を施すことを致す。釋迦世に出興して道敎を

光闡して群萠を拯ひ、悪むに眞實の利を以てせんと欲してなり。是を以て如來の本願を說くを以て經の宗致と爲すとあつて、本願は即ち敎である。其の本願を信ずるは即ち信である。其の本願の親心を頂けば念佛するより外は無い。念佛を申すは行である。斯く念佛を申せば佛に成る、佛に成るといふのが彌々眞實證の悟の境界に行く有樣であります。斯くの如く「本願を信じて念佛を申せば佛になる」といふ一語の中に敎行信證は皆な備はるのである。故に顯淨土眞實敎行信證といふも外では無い、「他力眞實の旨をあかせる聖敎は、本願を信じ念佛を申せば佛になる」といふ此の一つを敎へて下されたものである。而して此の敎行信證を今一つ縮める時は、即ち念佛成佛是眞宗となるのであります。

之に就いて此の念佛成佛是眞宗といふお言葉は誰のお言葉であるかといふに、既に御存知の事と思ひますが法照禪師の『五會法事讃』の中にあるのであります。法照禪師とは昔より善導大師の生れ代はりと申すお方で親鸞聖人は法照少康の二師は善導大師の中に入れて仕舞うてお出になるのである。『和讃』の中には

世々に善導いでたまひ、　法照少康としめしつゝ、
功德藏をひらきてぞ、　諸佛の本意とけたまふ。

とあります。其の法照禪師の『五會法事讃』を讀むと、此の念佛成佛是眞宗のお言葉がある。其所の御文が又實に難有いのであります。曰く

何者をか之を名けて正法と爲る。若し道理によらば是れ眞宗なり。好惡今の時須く決擇すべし。一々に子細朦朧すること莫れ。正法能く世間を超出す。持戒坐禪を正法と名く。念佛成佛は是れ眞宗なり。佛言を取らざるをば外道と名く。因果を撥無する見を空と爲す。正法能く世間に超出す。禪律如何ぞ是れ正法ならん。念佛三昧は是れ眞宗なり。性を見、心を了るは是れ佛なり。如何んが道理相應せざらん。隨分長い御文であるから一々お話しするのは煩らはしいが、意味丈を簡單に申しますと、親鸞聖人は此の御文を『行卷』の中に引いてお出になるのであります。其の親鸞聖人が此の御文をお讀みになる讀み方が又中々深い故一通りでは味はして貰ふ事が出來ぬのでありますが、一口に言ふと、眞の正法とは念佛の一法なるぞ、眞の眞宗とは念佛成佛の敎へ、唯此の一つなるぞとお知らせ下されたのである。今之を御文に就いて簡單に申すならば「何者をか之を名けて正法と爲る。若し道理によらば是れ眞宗なり」で、最も正しき法とは、眞宗是れ一つである。「好惡今の時須く決擇すべし。一々に子細朦朧すること莫れ」で、何れが好きか惡しきかを今の時に於てはつきり決めぬばならぬ。唯彼れも好い是も好いて漫然放つて置いてはならぬのである。「正法能く世間を超出す」で、眞の正法は一切世間を超出した法であるが、其の正法とは即ち「持戒坐禪を正法と名く」である。併しながら持戒坐禪は正法であるが、結局は「念佛成佛是眞宗なり」で、南無阿彌陀佛々々々と念佛するのが眞の敎へである、眞の正法とは唯此の念佛成佛の一法である。「佛言を取らざるをば外道と名く。因果を撥無する見を空となす。」で、佛敎であるか否やのけじめは何處であるかといふに、佛を念ずるか念ぜぬかの一點で決まるのである。

佛敎の根底たる南無佛南無法南無僧の三寶歸命によらずして佛言を取らぬ者ならば、即ち是れ外道である。因果を信ぜぬ者ならば即ち是れ空見である。「正法能く世間に超出す」で、此の正法は能く一切世間外道の法を超出したる法であるが、「禪律如何ぞ是れ正法ならんや。」――此の「禪律如何ぞ是れ正法ならんや」の一句は親鸞聖人が信仰上最も力を注いて御覽なされた句であります。普通文章上よりすれば隨分無理な讀み方のやうではありますが、聖人が御信念より御覽なさる時は、禪律は未だ佛敎の極意、眞の正法と言ふ事は出來ぬのである。眞の正法とは即ち「念佛三昧は是れ眞宗なり」である。「性を見、心を了るは便ち是れ佛なり」で、此世で性を見、心を悟るは是れ佛の事である。我々は念佛三昧の法に依りて未來其の佛の境界に行き、心性を見證させて貰ふのである。之が實に眞の正法である。「如何んが道理相應せざらんや」といふのであります。尙ほ之をも一度平たく申すならば、佛敎の佛敎たる處は何處であるか、佛敎の眞の正法とは何であるかといふに、眞の正法とは一切世間に超出する法である。其の正法は之を廣く言ふ時は持戒坐禪が正法であると言ふ事も出來るが、去りながら彌々の結局を言ふ時は念佛成佛が佛敎の佛敎たる眞の骨目である。坐禪戒律は未だ眞の骨目と言ふ事は出來ぬ。我々が南無阿彌陀佛々々々と念佛を稱へて佛に成るこそ、是れ實に佛敎の眞實、眞の正法であるといふのであります。此の文を斯く讀むは本文の上から見ると少し無理な位であるけれども、『行卷』に引用せられた文で見ると、親鸞聖人は明かに斯く頂いて御出なさるのである。聖人のお意にすれば、「性を見、心を了るは便ち是れ佛なり」で、此の世で悟りが開けたり、心性を見證したりする事が出來る位なら、我々は初めより佛なのである。佛の爲めなら救濟も念佛も要らぬ。我が頂く處では廣大なる念佛の惠みによりて未來佛になるこそ是れ眞に佛敎の骨目、眞の佛敎であるぞとの思召かと頂かれるのであります。

今日も話が段々六かしくなりますが、此の「念佛成佛是眞宗」の味ひを猶ほ色々の方面から頂き度ひと思ふのであります。今の御文に就きて猶ほ少し申すならば、「佛言を取らざるを外道と名く」で、佛敎を外道との別れ目は何處にあるかといふに、此の念佛を頂くか頂かぬか、此の廣大なる佛の仰せを信ずるか信ぜぬかによつて定るのである。人間が初めより佛言を信ぜず、唯自分自身を信じ、自分自身で振舞ふ丈けならば、もとより佛敎であるも無いも無い、頭から是れ外道の法なのである。去りながら同じ佛敎の中に在つても眞の信仰であるか無いか、眞宗であるか邪宗であるかといふけじめの一點は何處に在るかといふに、念佛三昧であるか無いかによつて別れるのである。其の肝心肝要の歸命の念佛、我々は之によつて佛に成る事が出來るのである。之が念佛の功德であります。『歎異鈔』には如何に仰せられてあるかといふに、

おほよろ惡業煩惱を斷じつくしてのち本願を信ぜんのみぞ、願にほこるおもひもなくてよかるべきに、煩惱を斷じなばすなはち佛なり、佛のためには五劫思惟の願その詮なくやましまさん。云々

即ち我々が此の世で煩惱を斷じ、性を見、空を知る事が出來

る位ならば初めより佛なのである。佛のためなら佛の教法は其の要が無い。佛教の眞意は斯くの如く此世で煩惱を斷じたり、是心是佛是心作佛と此世で佛に成るのでは無くして、佛にすがり、佛のお力によつて念佛成佛するのである。之が實に佛教の骨髓、眞の佛教である。念佛成佛是眞宗であると仰せられたのである。斯く頂くと此の念佛成佛是眞宗の一語は實に尊いお言葉であります。

猶ほ法照禪師の『五會法事讃』の事を申した序に、法照禪師の事を少々話しますと、此の人は非常に能く念佛を稱へられたので支那では名高い方であります。殊に法然聖人は此人のお言葉を非常にお喜びなされたものと見え、『和語灯錄』などには度々お引きなされてあります。中にも特に著しきは法照禪師が五臺山にて文殊菩薩に遇ひ、念佛の廣大なる事をお聞なされたといふ事を『和語灯錄』を初め色々の處にお引きなされてある。法照禪師が五臺山に行かれると、澤山の菩薩が居られた。此所は何處であると尋ねられると、文殊普賢の居られる所であるといふ事である。其處て出離の要法を尋ねられると向ふの文殊菩薩の所に行けと言はれた。其處て文殊菩薩の所に行くと、文殊菩薩は懇々と往生淨土の計り事は念佛の一行に如くは無い事を教へられた。『和語灯錄』の文を拜讀すると、

大聖竹林寺の記に云く、五臺山竹林寺の大講堂の中にして、普賢文殊東西對座して、もろ〳〵の衆生の爲に妙法を說き給ふ。時に法照禪師ひざまつきて文殊に問ひ奉て、未來惡世の凡夫いづれの法を行ひてか、永く三界を出て〳〵淨土に生るゝ事を得べきと。文殊答て宣はく、往生淨土の計りごと彌陀の名號に過ぎたるはなく、頓證菩提の道、只稱名の一門にあり。是に依て釋迦一代の聖教に多く讃る所皆な彌陀に有り。如何に況んや未來惡世の凡夫をやと答へ給へり。(中略)文殊の宣はく、未來世に於て惡衆生西方彌陀名號を稱念すれば、佛の本願に依て生死を出づ、直心を以ての故に極樂に生ず。云々。

是れてあります。此處の所が法照禪師の傳といふと必ず出てある。此外法然聖人が他力念佛を言はれる時には屹度法照禪師のお言葉を引用せられてあるのてある。

其の法照禪師の御文は非常に有難いのが澤山あるが、法然親鸞兩聖人が共にお喜びなされたものを擧げると、

如來の尊號は甚だ分明なり。十方世界に普く流行せしむ。但名を稱するのみ有つて皆往くことを得。觀音勢至自づから來り迎え玉ふ。彌陀の本願特に超殊せり。慈悲方便して凡夫を引く。一切衆生皆度脫す。名を稱すれば即罪消除することを得。凡夫若し西方に到ることを得れば、曠劫塵沙の罪消亡す。六神通を具し自在を得て、永く老病を除き無常を離る。

斯く彌陀念佛の一行が最も肝要であると言つて下されたのが法照禪師の御教化である。猶ほ此の御文と一緒に親鸞聖人が『行卷』に引用なされた慈愍和尙の御文が非常に有難い。之も序に申しますと、

彼の佛の因中に弘誓を立て玉へり、名を聞いて我を念ぜば總て迎え來らしむ。貧窮と富貴とを簡はず。下智と高才と

を簡ばず。多聞と淨戒を持てるとを簡ばず。破戒と罪根の深きとを簡はず。但回心して多く念佛せしむれば、能く瓦礫を變じて金と成ら令む。云々。

如何なる罪惡深重の者も但回心して念佛せしむれば、瓦礫を變じて金と成すとは、如何にも廣大なる念佛の功德であります。

偖て此の念佛の一法によりて佛に仕て頂くのがまことの佛教、即ち眞宗である。夫故眞宗の骨目と言へば、佛の惠みを信じ念佛するといふ事の外は無い。眞の佛教であるか無きかは此の念佛を信ずるか信ぜぬかによつて決まるのてある。是れ實に眞宗と他宗との別れるけじめてある。唯何心も無く南無阿彌陀佛々々と念佛して喜ぶか喜ばぬかによつて右と左の別れ目を生ずるのてあります。

法然聖人が一代苦勞して選擇本願念佛をお說き下されたが玆てある。昨年來法然聖人の選擇本願念佛の事は余り度々申すのてありますが。何程言つても味ひが盡きぬ故、又重ねて申しますと、選擇本願は外ては無い。佛が我々を助けるに、佛は戒律て助けると仰せられるのぢや無い、座禪て助けると仰せられるのぢや無い。又修行や作善で救ふと仰せられるのぢや無い。何故てあるか。我々は若し座禪や戒律て助けるとあつては助からぬ僪弱怯劣の衆生なる故てある。若し修行作善で救ふとあつては、救はれ難き惡凡夫なる故てある。其處で佛の本願は諸有坐禪戒律、一切の諸行諸善を選び捨てゝ、唯念佛の一法を與へ、稱へ易き名號を南無阿彌陀佛々々々と稱へしめて、其者を救はんとお誓ひ下されたのてある。此の選擇本願を我々の心に頂く心持は何うか。我々は戒行も出來ず座禪も出來ず、善き事とては何一つ出來ぬ淺間しき者てある。『歎異鈔』の第二章に

自餘の行をはげみて佛になるべかりける身が、念佛をまうして地獄にもおちてさふらはゞこそすかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ。いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。

と仰せられて、我々は念佛己外に戒行にしろ、坐禪にしろ何一つ爲る事が出來ぬ。出來ぬから念佛するのて無く、出來ぬ者故佛の本願は初めから南無阿彌陀佛の一つを以て救ふと言つてゝ下さるのてある。此の廣大のお慈悲に氣が附けば何人も此の念佛を喜ばずには居られぬのてあります。猶ほ申せば我々が、坐禪や戒行ては行けぬと氣が附くは我が力ては無い、佛かねて斯くの如き者なる事を初めより知召しての御本願てある。此の御本願があればこそ、我々が眞實自力ては行けぬ事も知らせて貰へるのてある。之が法然聖人の選擇本願念佛の味はひてあります。

斯く頂くと法然聖人の選擇本願念佛は、唯徒に口に稱へる念佛ては無い。實に慈愍和尙の言の如く、貧窮富貴、下智高才、多聞淨戒、破戒罪根、何者にも稱へ易からしめんが爲に選擇攝取して下された本願の念佛てある。此の念佛を頂いて南無阿彌陀佛々々々と喜ぶは、即ち本願に從ふのてある。言ひ換ふれば如來の本願を其儘頂いた姿が、即ち南無阿彌陀佛々々々と念佛を稱へて喜ぶ有樣てあります。て念佛成佛是眞宗とは、此の本願のまゝに唯念佛ばかりと頂いた處である。『歎異鈔』

には宣はく

親鸞におきてはただ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおほせをかうふりて信ずるほかに別の子細なきなり。云云。

我々は外の事ては可かぬ、唯念佛ばかり、唯お慈悲ばかりである。此の「ただ念佛して」と頂かれた一言が、念佛成佛是眞宗と喜ばれた所てあります。て親鸞聖人の御敎化は信仰に違はぬけれど、其信仰は暫くも念佛を離れた信仰では無い。聖人は常に念佛々々と仰せられ、眞宗信者の事を常に念佛者々々と言つてお出になるのてある。寧ろ聖人が眞宗と名けられたは廣大なる御慈悲を頂いて、唯南無阿彌陀佛々々々と喜ばれた處から、念佛成佛の意味て仰せられたのてあります。

下

話が段々深くなりますが、念佛を稱へて佛に成る事は獨り淨土のみの敎へては無い。法照禪師の事は先程も申したのてありますが、其の法照禪師の喜ばれた文珠菩薩發願の文にも、一切衆生唯念佛の一法によりて佛に成るが佛敎の本意てある、といふ意味の事が仰せられてある。其處て法然聖人が佛敎全体の中から骨目を闡んて念佛の一法をお示し下されたのは何かといふに、親鸞聖人は常に大勢至菩薩が法然聖人と現はれて、智慧の念佛をお勸め下されたのてあるとお喜びなされてある。平日拜讀する『淨土和讃』の畢りに親鸞聖人は特に勢至和讃を作りて如何にお示し下されてあるかといふに、『首楞嚴經』の意によると仰せられて、宣はく。

超日月光この身には、念佛三昧をしへしむ、
十方の如來は衆生を、一子のごとく憐念す。
子の母をおもふごとくにて、衆生佛を憶すれば、
現前當來とをからず、如來を拜見うたがはず。
染香人のその身には、香氣あるがごとくなり、
これをすなはちなつけてぞ、香光莊嚴とまふすなる。
われもと因地にありしとき、念佛の心をもちてこそ
無生忍にはいりしかば、いまこの娑婆界にして。
念佛のひとを攝取して、淨土に歸せしむるなり、
大勢至菩薩の大恩ふかく報ずべし。

『首楞嚴經』の中に大勢至菩薩が念佛を以て悟りに入られたと說かれてあるが、其勢至菩薩が此の娑婆世界に於て念佛の一法をお勸め下されたのが、法然聖人一代の化導てあるとお喜びなされたのてある。之は法然聖人の事てあるが、又龍樹菩薩和讃には、

智度論にのたまはく、如來は無上法皇なり、
菩薩は法臣としたまひて、尊重すべきは世尊なり。
一切菩薩ののたまはく、われら因地にありしとき、
無量劫をへめぐりて、萬善諸行を修せしかど。
恩愛はなはだたちがたく、生死はなはだつきがたし、
念佛三昧行してぞ　罪障を滅し度脫せし。

即ち一切菩薩も無量劫に於て萬善諸行を修したけれども、恩愛斷ち難く生死盡き難くして、遂に解脫を得る事が出來無つた。唯念佛三昧によつて始めて最後の度脫を得たのてあると言つてお出て下さるのてある。して見れば此の念佛三昧は三

世十方一切諸菩薩出世の本意、佛敎の佛敎たる骨目は此の外に無い。之を勢至菩薩の化身として此世に現はれ、一代お說き下されたが法然聖人てある。故に佛敎と言へば甚だ廣いが、要するに此の念佛を頂くと頂かぬとてある。此の念佛を頂けば即ち本願を信じたのてある。自力他力、佛敎外道の別れ目は、此の念佛を頂いて南無阿彌陀佛々々々と喜ぶか喜ばぬかて決まるのてある。之が親鸞聖人が法然聖人からお頂きなされた眞宗の骨目てあります。

私は先日緣ありて親鸞聖人が法然聖人の御敎化をお記しなされた『西方指南鈔』の御直筆を拜見しました。之は今度淨土宗から『法然上人全集』の中に入れて出版せられるといふ話てある。之て拜見すると、親鸞聖人が法然聖人を慕はれた事は實に著しきもので、中にも法然聖人が大勢至菩薩の御化身てあるといふ事が度々お書きなされてある。法然聖人が或時三井の僧正公胤法師へ夢に告げて宣はく、「我れ本地は大勢至菩薩なり衆生を化せんが爲に此の界に來る事度び〳〵なり。云云」といふ事が本文にも紙裏にも度々書かれてある。之て頂くと法然聖人の御一代は全く大勢至菩薩が選擇本願念佛の一つをお弘め下されたものてあります。夫てあるから法然聖人の御敎化といふと南無阿彌陀佛の外は無い。

甚だ學問沙汰のやうてはありますが、親鸞聖人が『敎行信證』に法然聖人の御文をお引きなされてあるは『行卷』に唯一箇所丈てある。其の一箇所は即ち『選擇集』劈頭の選擇本願念佛集、南無阿彌陀佛、往生之業念佛爲本、の文、及び

夫れ速に生死を離んと欲はゞ、二種の勝法の中、且く聖道門を閣きて選んて淨土門に入れ。淨土門に入んと欲はゞ正雜二行の中、旦く諸の雜行を抛てゝ選んて正行に歸すべし。正行を修せんと欲はゞ、正助二業の中、猶ほ助業を傍にして、選んて正業を專にすべし。正定の業とは即是れ佛名を稱するなり。稱名は必ず生を得、佛の本願に依るが故に。

の御文てある。即ち佛名を稱する一つが正定の業てある。佛敎の骨目、釋尊の出世の本意も此の念佛以外に無いといふが法然聖人の御敎化の最も著しき所てある。此の文を引いて次に自ら宣はく。

明に知ぬ。是れ凡聖自力の行に非ず。故に不廻向と名るなり。大小の聖人重輕の惡人皆同じく齊く選擇大實海に歸して念佛成佛すべし。

と。即ち大小の聖人輕重の惡人、如何なる者も此の選擇本願に歸して念佛成佛疑ひ無いと言ひ切つて下されたのてある。而して直ぐ續けて

是を以て論の註に曰く、彼の安樂國土は阿彌陀如來の正覺淨華の化生する所に非ざること無し。同一に念佛して別の道無きが故にとの玉へり。

安樂國土に生るゝ者は阿彌陀如來正覺のお誓ひ——我が名を稱する者は如何なる者ても迎え取らずは正覺は取らぬとお誓ひ下された其の正覺淨華の御誓ひに從つて南無阿彌陀佛々々々と念佛しながら生れさせて貰ふのてある。佛敎の眞實彌陀の本願は此の念佛以外に無いぞとお知らせ下されたのてある。而して直ぐ次に

爾れば眞實の行信を獲る者は心に歡喜多きが故に、是を歡喜地と名く。是を初果に喩ふることは、初果の聖者尙ほ睡眠懶惰なれども二十九有に至らず。如何に況んや十方群生海、斯の行信に歸命すれば攝取して捨て玉はず。故に阿彌陀佛と名け上る。是を他力と曰ふ。

十方微塵世界の衆生、南無阿彌陀佛々々々と如來廣大の惠みを喜ぶ者なら、如何なる者をも攝取して捨てゝ下さらぬ。かるが故に阿彌陀如來と申奉るのである。是れ實に他力の至極である。

是を以て龍樹大士は即時入必定と曰ひ、曇鸞大師は入正定聚之數と云へり。仰て斯を憑む可し。專ら斯を行す可き也。此のお慈悲の頂けた者なら、即ち必定の菩薩である。正定聚の分人である。次が有名なる光明名號の文であります。

良に知ぬ、德號の慈父無さずば能生の因闕けなん。光明の悲母無さずば所生の緣乖きなん。能所因緣和合す可しと雖、信心の業識に非ずば光明土に到ること無し。眞實信の業識斯れ則ち內因と爲す。光明名の父母斯れ則ち外緣と爲す。內外因緣和合して報土の眞身を得證す。故に宗師は光明名號を以て十方を攝化し、但信心をして求念せしむと言へり。又念佛成佛是眞宗と云へり。又眞宗遇ひ叵しと云へり。知る可し。

此の廣大なる南無阿彌陀佛の父と、光明の母によりて、信心の業識といふ如來廻向の信心を賜はるのである。此の信心の業識を頂かぬと極樂に行く事は出來ぬ。光明名號の父母は此の中心の信心を育て上げて下さる惠みである。此の惠みによりて信心の業識を頂き南無阿彌陀佛々々々と念佛を稱ふれば報土の眞身を得證し成佛させて下さる。初めに申した『歎異鈔』に「本願を信じ念佛を申せば佛になる」と仰せられたが茲であります。この故に「宗師は光明名號を以て十方を攝化し、但信心をして求念せしむと言へり。又念佛成佛是眞宗と云へり」である。親鸞聖人は以上申した『行卷』の御文を斯く念佛成佛是眞宗の一言で止めてお出になるのである。茲が即ち先程よりいふ念佛成佛是眞宗の味ひである。茲を能く頂かねばならぬのであります。

之を要するに親鸞法然兩聖人の御眞意は外ては無い。我々は如何にしても坐禪や戒律の出來ぬ者である。之は我々が初めてゞは無い、一初菩薩も出來無つた、唯念佛三によつてのみ罪障を滅し度脫したと言つてお出なさるのである。況んや末代の我等に於てをやである。去りながら其の出來ぬ者の爲めに、佛は此念佛を成就して、之を以て助けるといふ御誓願である。此の大悲の親の惠みを頂いて仰のまゝに念佛するがに眞の佛敎である、眞宗である、此の念佛を頂かぬ事には眞宗に遇うた所詮が無いといふのであります。

猶ほ又之を『和讃』で頂くと、

念佛成佛これ眞宗、　　萬行諸善これ假門、
權實眞假をわかずして、　　自然の淨土をえぞしらぬ。

此の廣大のお慈悲を頂いて南無阿彌陀佛々々々と念佛するが眞の佛敎、眞宗である。萬行諸善であれよ是よと自力で苦しむのは皆是れ假りの門戸である。然るに此の權實眞假の別を知らずして、我も人も自力根性に迷うて居るのは、今猶自然の淨土を知らぬものである。

聖道權假の方便に、　　衆生ひさしくとゞまりて、
諸有に流轉の身とぞなる、　　悲願の一乘歸命せよ。

親鸞聖人の御敎化は實に手嚴しい。聖道門の敎を權化方便の道ぢやと仰せられるのである。我々が善を爲ねばならぬ、あれも爲ねばならぬ、是も爲ねばならぬと思ふのは、皆な是れ聖道權化のかりの道ぢやと仰せられるのである。我々は其の假の道に久しく止まりて、行きつ戻りつ流轉して居るのである。早く悲願の一乘、眞の佛道に歸命せよとてある。斯くの如く聖人が眞宗と仰せられる意味は、唯單に淨土の骨目といふ丈けでは無い、實に佛敎の骨目、之を措きて佛敎の眞實は無いとのお腹である。凡て聖人の眞の字の用ゐ方は絕對的である。聖人は此の惠みを頂いた者を如何に仰せられるかといふに、眞の佛弟子であると言はれてある。『信卷』に宣はく、

眞の佛弟子と言ふは、眞の言は僞に對し、假に對するなり。弟子とは釋迦諸佛の弟子、金剛心の行人なり。斯の信行必ず大涅槃を超證すべきが故に眞の佛弟子と曰ふ。と、

即ち眞とは僞に對し假に對する言葉である。假とは八萬四千の聖道門である、僞とは九十五種の外道の事である。余の萬善萬行の行者は總て是れ假の行者である。僞の行者である。眞の佛弟子とは唯念佛行者あるのみであるとの仰せであります。

偖て以上は佛敎全體の上より親鸞聖人が念佛成佛是眞宗と喜ばれた御眞意を申したのであるが、最後に之を我々の心に頂く心持に就き、一言申しますと、又『和讃』に

信は願より生ずれば、　　念佛成佛自然なり。
自然はすなはち報土なり、　　證大涅槃うたがはず。

この和讃が實に有難いのであります。上來述る如く念佛成佛是眞宗であつて見れば、念佛が大切なに違はぬが、其の念佛は我々が力みて稱へる念佛ぢや無い。「信は願より生ずれば、念佛成佛自然なりなのである。茲の所が初めに申した「本願を信じ念佛を申せば佛になる」の文と、ひだと合ふのであります。我々が本願を信じ念佛を申すのでは無い。佛の廣大なる本願の親心を承はつて此の罪深き自分に爲のお慈悲であると氣が附けば、申さずに居らうと思うても申さずには居られぬのである。極言すれば泣きながらも口には南無阿彌陀佛々々々と念佛が浮び出て下さるのである。『歎異鈔』には宣はく、

彌陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念佛まうさんとおもひたつこゝろのおこるとき、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり。

と、即ち本願が胸に屆けばいつの間にやら南無阿彌陀佛々々々と自然に口に浮んで下さるが、念佛の廣大なる功德である。又別の文には、

わろからんにつけてもいよ〳〵願力をあふぎまいらせば、自然のことはりにて柔和忍辱のこゝろもいでくべし。すべてよろずのことにつけて往生にはかしこきおもひを具せずして、たゞほれ〳〵と彌陀の御恩の深重なることをつねにおもひいだしまいらすべし。しかれば念佛もまうされざふらふ。これ自然なり、わがはからはざるを自然とまうすな

り。これすなはち他力にてまします云云。

即ち惡ろからんに就けても願力を仰ぎ參らせば、自然の理りにて念佛が浮んで下さる。是れ即ち「信は願より生ずれば、念佛成佛自然なり」である。我計はざるに自然に浮んで下さるから、自然の念佛なのである。次に「自然はすなはち報土なり、證大涅槃うたがはず」で、斯く自然に念佛を稱へさせて貰へうてる中に本願に引かれて自然に自然の淨土に行かせて貰へる。念佛成佛是眞宗と頂いて念佛を稱へて居る中に、若不生者不取正覺の誓願て、否でも應でも成佛させて下さるのである。『大經』の中には「自然の牽くところなり」と仰せられて、廣大なる本願力により、我々は自然に引き寄せて頂く。斯く集りて念佛してる間も常に引張り寄せられて居るのである。是れ自然である。而して斯く引寄せられて自然に生るゝ淨土は、即ち其の自然の極まり、無爲法身の御國である。「自然はすなはち報土なり、證大涅槃うたがはず」であります。

偖て斯く頂く時は「念佛成佛是眞宗」の語程有難いお言葉は無い。全体佛のお慈悲を押し詰めて言ふ時は念佛の一語に盡きるのである。親鸞聖人が『行卷』に元照律師を始め多くの方々が念佛の一法と言はれた御文を引き集めて、佛敎全体は皆な念佛の一法に籠つて仕舞ふと仰せられたは之である。斯くなると是れが信、是れが行などいふ區別は無い。唯法然聖人が熊谷蓮生房へ御敎化の如く、

義なきを義とす、樣なきを樣とす、淺きは深きなり、只南無阿彌陀佛と申せば、十惡も五逆も、三寶滅盡の時の者も、一期に一度も善心なき者も、西東わきまへぬものも、決定して往生を得候なり。釋迦彌陀を證とす。

と頂かせて貰ふばかりであります。自分の計らひを用ゐず、唯如來のお慈悲を喜んで念佛させて貰ふのが義なきを義とするのである。親鸞聖人は晩年に於て非常に此の義なきを義とすとの敎化をお喜びなされた。他力には義なきを義とし樣なきを樣とすである。何事の在しますかは知らねども、唯斯の如き罪深き身を哀れませ給ふ廣大の御不思議にまかせ、南無阿彌陀佛々々々と念佛成佛の期を待つばかりであります。

私はかねて此の念佛成佛是眞宗のお言葉が有難いと喜んで居ましたが、今度彌々其の難有い事に氣就が就いて、今日は此のお言葉が眞宗の名の源なる事、及び廣く申せば佛敎全体の骨目なる事を申したのであります。和讃に曰く、

縱令一生造惡の
衆生引接のためにとて
稱義名字と願じつゝ。
若不生者とちかひたり。

南無阿彌陀佛々々々、

無題

念佛の聲だに口にたへせずば
御名よりひらく信心のはな
助くるぞたのめの母のよび聲の
今ぞきこへし南無阿彌陀佛。
思ふことかなはねばこそうれしけれ
かなはぬだにも願はれぬ世ぞ。
往生を願ふ心にかはりなき
たのしみうくる今日のうれしさ。

（香樹院語錄）

聖傳

ジャータカ釋尊傳

第二十三　惡しき交は善行を壞す

世尊ジェタバナにましましゝ時、提婆達多に就きて次の譚を說き給ひぬ。提婆は王子アジャータサッツに寵を得て大に利と譽とを受けぬ。王子は彼の爲にガヤサイサに僧院を建て、日々最良の古き香れる米にて作れる食物五百鉢を送りたり。されば提婆達多の會下は漸く增加し彼は常に弟子と共に僧院に住しぬ。

時に二人の友ラージャガハに住しゝが、其一人は世尊に歸し、他は提婆に歸して僧となりぬ。彼等は各諸所に於て巡りあひ、又折には僧院をも訪れぬ。

一日提婆に屬せる僧は友に云へり、「兄弟よ汝はなど日々勞苦と煩はしさを厭はずして、食を乞ふや、提婆はガヤサイサに住して最良の食を給せらる、汝は何の故に日々勞するや、汝は尊ろ朝に於てガヤサイサに來りよき食物を受けずや、我等が甘き粥を飲み十八種も料理の皿をかへて食するは樂しからずや」と。

彼はかくの如く屢々勸められしをもて心動きぬ。以後は日々ガヤサイサに趣むき食事を爲し、竹園に早く歸り來りぬ。されどこは永く秘す事能はざりき、いつしか喧ましく噂にのぼりたり。

されば友達はそが眞實なりや否やを彼に問ひぬ。彼おどろきて「誰ぞ告げし」と問ひ「かく〳〵の人」と聞きて云ひぬ。「よし、そはまことぞ、兄弟よ、我はガヤサイサに行けり、食物をも受けたれど　人は提婆に非ずして他の人なり」と。「兄弟よ、提婆は佛の怨敵なり、彼はアジャータサッツの愛顧を占め、寧惡によりて交を結びぬ。汝は涅槃に導き給ふよき敎の下にありながら、提婆が彼の惡によりて得たる食を受くるとは何ぞや、來れ、我等は世尊の前に連れ行かん」と云ひて講堂に伴ひぬ。

世尊彼等を見そなはし「汝等は何の故を以て此僧を强ひて連れ來りしや」と問ひ給ひぬ。

「世尊よ、此僧は世尊に歸依し來りながら提婆の如き惡人がおのれの爲に得たる食を招伴せり。」

世尊は僧にその實否を正し給ひしに彼曰く、

「世尊よ、我に食を與へしは提婆にはあらで他の人なり」と

時に佛宣はく「僧よ言譯を爲す勿れ、提婆達多は罪ある猛惡の者なり、如何にしてか此處に僧たる汝が彼の食を喰むべき、汝は遂へる人每その言に從ひて事をなすなり。」とて次の譚を述べ給ひぬ。

* * * * * *

昔ブラマダッタ、ベナレスにり在し時菩薩は彼の大臣たりき。時に王は「乙女の顏」と名づけたる壯大なる象を有しぬ。彼はいと柔和にして善良なりしかば誰をも害する事なかりき。

一日強盗彼の室の傍近くに來りて彼等の謀を廻らしぬ。「かくの如く逃道を作り、又かくの如く家を破壞せん、我等は暴力を以て運ふべし、人は打殺し、打倒してん、萬事、狐疑する事なく、鋭く激しく殘酷に爲さん」と互に注意し戒めつゝ別れぬ。次日も亦寄合ひぬ。如斯して數日に及びしが象は彼等の談るを悉く聞きて、「そは全くおのれに敎ふるものなり」との念を懷き、「我は以後暴々しく激しき者とならん」とて、遂にいつしか性質は一變せり。

朝まだき番人は室に入り來れり、象は忽ち彼をば長き鼻に卷きつけ大地に投げて打殺したり。かくの如くして來る者毎に皆殺しぬ。王是を聞き。直ちに菩薩を召して象の狂氣せる所以を見出すべしと命じたり。

菩薩行きて象を見しに何處も身體には異常なかりしかば深く其理由を考へたり、遂に彼は思ひ當りぬ。そは象が誰ぞ暴々しき事を語れるを聞きて、おのれに敎ふるものなりとの念を抱きしならんとて、番人に向ひ、誰人か來りて象の傍に於て談りし事ありしやと問ひぬ。

「然り、君よ或盗賊等來りて共に語りし事ありき」と答へぬ。

菩薩は去りてかくと王に告げたり、「大象には何等の異常なし、たゞ盗賊等の談るを聞き遂に狂氣せしならん」と。

「さらば如何にして是を癒すべき」

「聖僧を請じ、象の前に於て正法を說かしめ給へ。」

「さらば然なすべし」と王は直ちに、聖者を迎へたり、菩薩彼等を象の小屋近く座せしめ聖なる事を談らしめたり。

聖者は語り始めぬ、「誰をも打つ勿れ、又誰をも殺すべからず、正しき行の人は忍耐强く、愛ありて、慈悲深くあるべし。」

これを聞きつゝ象思へらく、「これらの人の敎へは我に對してならん、爾今以後善良とならん」とてそれより全く馴れて穩になりき。

王は菩薩に「象は如何になせし、靜穩になりしや」と問ひぬ。

然り、我主よ、かの如く惡しかりし彼も、賢者の爲にもとの性を復活したり。」とて偈を稱しぬ。

賊のかたるをきゝしかば、
「乙女の顏」は暴れ出しぬ。
聖者の言をきゝしより
もとのこゝろに行かへり
大象確とよくなりぬ。

王菩薩のよく獸の心情をさへ解するを嘉しぬ。

師は此譚をおへて、僧にのたまはく、「汝は前世盗賊の言を聞きて是に從ひ、聖者の言を聞きて亦是に從ひし如く、今世も常に人の言に左右せらるゝなり。「乙女の顏」は即ち汝にして王はアナング大臣は我なりき」と。

第二十四　象と犬の話

世尊ジエタバナにおはしゝ時、或老僧と信者とに就きて語り給ひき。

サーヴッチに於て二人の親友ありけり。一人は僧となり日々他の友の家に行き食事をなしぬ。友亦己も共に食し、終れば睦じく共に僧院に到りて日沒に到るまで語り暮して歸れ

り。僧は友を送りて町の門まで行き此處にて別を告げ一人僧院に歸るが常なりき。

一日僧等說敎の室にて、彼等の睦まじき事を語りてありしに世尊是を聞き給ひて宣く、

「比丘等よ、彼等は現今睦まじきのみならず、前世亦然なりき」とて次の譚を談りたまへり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

昔てブラマダッタベナレスに治めし時菩薩は其大臣たりき。其時或一疋の犬、王の象と親しみぬ。犬は日々其傍にのみ在りて或は象の食ひあまりしもの、またこぼれし食片などを拾ひて食ひなどするうち、無二の親友となり、常に各幸福なりき。犬は折々象の長鼻を捉へ左右に振り動かして遊びたはむれたり。

一日一人の農夫來りて象の番人に金を與へ、此犬を村に伴ひ行きたり。

然るに象は此日より犬を惜しみて全く飲食せざりき、されば番人は之を王に告げぬ。王菩薩に此由を問ひしかば、直ちに象を檢せしに何等の異常なかりき。たゞいと悲しげに見えぬ。思へらく、「彼は何者かを惜しみて哀しめるなるべし」と、番人に「象と睦ましかりし者なきや」と問ひぬ。

「君よ彼の最も好める者は、犬なり、そは或人に遣しぬ。」と答へたり。

菩薩王にかくと告げぬ。「象には何の變りもなし、たゞいと親しかりし犬を離せし爲悲しめるなるべし」と。

米や秣の一はしも
もはや取るまじ、浴すとも
など樂しまん、思ひみよ
斷えず交はり、大象は
犬を愛してやまぬなり。

王是を聞き、如何に爲すべきかを謀りたまひしに「宣告を下して王の象が最も好める犬を連れ行きし者あり、象は大に之を懷しめば直ちに彼を放つべしとのたまへ」と菩薩はすゝめぬ。

王然なせしに犬は直ちに放たれぬ。急ぎ飛び歸りて、犬は象の傍に行きしに、象は懷しげに鼻にて是を取り、額にのせて泣き叫び、又下して犬の喰ふさまを眺めしが、己も漸く食をとりぬ。

王は菩薩を大に嘉したり、「犬とは信者にして、象は老僧なりき」と說き給ひぬ。

今度の一大事の後生、おのが善惡のはからひをすてて、たゞ阿彌陀佛に助けられて、往生するぞと信じ奉り、念佛申すより外なき也。御化導にあひ奉り候へば、たゞ己が助かると思ふこゝろになりてと、なれぬ身をしらずに、なれることのやうに存じ候が、無始以來の自力にて、此度その心に執心のやまぬが不便さは、此心は萬劫の仇なりと詮ぜられたり。是によりて助かると思ふ心をまつにもあらず、調べるにもあらず。本願に助けらるゝと、御問かせにあづかり候へば、助かるとなられたが助かるにあらず、助からぬものゝ助かると思ひとりて、念佛申し候が、肝要の御事と存じ候也。

御同行中　　德　龍

（香樹院語錄より）

告白

一一皆善巧

能戸得一

私は、今度、近角恩師の仰に從ひまして告白をさせて頂きます。實は恩師が先般當南濃地方へ御傳道になりました節、私の入信の徑路、其後の模樣などを御聞きを願ひまして、御教化を得たいと存じましたが、しかし、御忙しい中を自分一人のために申上るのもとさしひかへて他日を期した次第で御座いました。然るに本月十四日辱くも電報や御尊簡を下さいまして「報佛恩の一助とも思」て告白文を送れとの仰てありましたから喜んて告白をさせて頂きます。

私は、信仰の事には餘り氣のない家庭に育ちましたので、從て自分もごく冷淡て宗教の話しが出ますと不快を感じたり攻擊を加へたりするといふ風て御座いました。私は元來體の弱い方て、幼い時からの兩親の心づくしは申上るまてもありません、十九歳の時、師範の入學試驗を受けました。親も自分も到底合格は覺束ないと思つて居ましたが學業にも體格にも辛じて合格致しました。後から思へば此事が既に唯事ては無かつたのてあります。私の性質ではありますが、殊に入學後は己れを正善と考へ、兎角他人の缺點のみに眼をつけ、理想を實現しようとしては其通りに行へず。ために苦惱がたえませんてした。三十六年學校を出ます前頃から胃が惡くなりました。任地は家から三十里計も距つて居ました。元々小心の私てありますから家の事を思ふて心配し、自分の病氣には苦しみ一方には又自分は小學校教員てはつまらん、是非中等教員にならうといふ虛榮心に驅られた野心が盛てありました爲に自分の勉强が主て校務を客として居ました、かうして居ます中に其年の秋になつて堪えられん苦悶に陷りました。それは私が肺尖カタルに犯された事てあります。もう死の宣告の下つたも同樣と思ひ運命の非なるを嘆き、兩親の悲嘆を想ひ、前途に一點の光なく全く暗黑界の人となりました。翌年五月親友のすゝめて休職療養に決し任地に別れました。萬感胸に迫つてたゞ泣きに泣きました。後から思へばこの人生の悲慘に泣いて居るときは、大悲矜哀の慈眼、常にやるせなき同情の涙に霑ふて居たまふ時てあるのてあります。途中での見聞は或は一生の見おさめ聞きおさめてあらうと考へました。しかしこれほどに感じましても心の底ては、「自分だけは死ぬ樣なことは無い、きつとなほるてあらう」といふ誠にはかないしかも唯一の頼みを持つて居ました。實にしぶとい人間て御座います。家にかへりましたのはその月、即、六年前の五月の十四日てありました、恩師から電報の着いたのも五月の十四日、不思議と申す外はありません。今日の恩寵と、六年前の憂愁と思ひ合せて感謝にたえません。

さて、家に歸りましてから、色々療養を致しました。病氣は重りませんてしたが煩悶が止みません。これより先、靜岡に

精神療法の大家が有ることを聞きましたから、其方へ參りまして治療を受けました、これは、故桑原天然先生の高弟てあらせらるゝ御方てあります。こゝて全快をさせて頂き家に戻りました後から思へばこれがまた唯事ては無かつたのてあります。

それから、獨力て家庭を理想的に改造しようと取りかかりました、根が己を正しとして專ら眼を外他に向ける客觀的の方なので、家族のすることなすこと悉く氣に入りません、そこて飽くまて自分の理想に近づけようとあせりますがとてもそんなことは出來ません、懊惱煩悶、親をうらみ、弟妹を怒り、殆寧日なき淺ましい有樣、加ふるに病氣再發の不安の念が起り、頭がかきむしらるゝ樣てありました、三十八年の四月、平素敬慕して居ました天然恩師が靜岡の療養所へ御出になると聞き、そてへ參りました。そして色々御話を承りましたが、猶上京して道を聞けとの仰てそのまゝ上京致しました。それから全恩師から二十日餘り、主として信仰上の御話を承りました。ここに始めて自己の罪惡の深重なることを知らせて頂き、そして又、眞宗の教を信ずる樣に御導下さいました、滯京中に求道學舍に一度九段の求道會に一度近角恩師の御講話を拜聽に出ました。これが御緣の始て御座いました。求道學舍に伺ひました歸途、文明堂て嘆異鈔を求めました。私が御聖教を手にする始めてあります。同行の御方から百千、回を重ねて拜讀せよとの仰てありました。後てこれも如來より與へて下さつたのだと知れました。序に嘆異鈔は拜讀すれば拜讀するほど有り難くあります。一寸岐路に入りましたが、滯京中いつ頃からてしたか、不圖氣付かして頂きましたのはかうて御座います。「自分は是迄色々苦しんて居たがその若んだことは皆佛の御計ひてあつたのてある、師範に入學の出來たのも遠地に赴任したのも、病氣に犯されて苦しんだのも、靜岡に行つて病氣が直つたのも、東京に來てこんなお話の聞けるのも皆自分の仕業ては無い、唯事ては無かつた、自分を攝取したまふ大悲の善巧方便であつた」と氣付かして頂きました。私は從來佛の有無など一向無頓着てありましたが、かく氣付かして頂きました上は有るか無いかなどはもう問題てはありません。彼地此地へ、自分の體に綱をつけて引つ張つて下さつた樣に大悲の救濟が實感せられ、實にうれしくてたまりませんてした。ふりかへつて見ますと、過去の逆緣は悉く恩寵てあつて運命の非なるを嘆きました病氣を今では實に尊く有り難く思つて居ります。「彌陀の五刼思惟の願をよく〳〵案ずれば ひとへに親鸞一人がためなりけり」信仰問題に冷淡であつた私が御慈悲を知らせて頂ける樣になつたのは不可思議の誓願と申す外はありません。

釋迦彌陀は慈悲の父母　種々に善巧方便し
われらか無上の信心を　發起せしめたまひけり
生死の苦海ほとりなし　ひさしくしつめるわれらをは
彌陀弘誓のふねのみぞ　のせてかならずわたしける
超世の悲願ききしより　われらは生死の凡夫かは
有漏の穢心はかはらねど　心は淨土にすみあそぶ

御講話を承りました御緣て今日まて「求道」を讀ませて頂き法喜を得させて頂いて居ります。

三十八年の六月から復職を致しました。其年の七月頃かと覺えますが、「信仰の餘瀝」と「懺悔錄」とを拜讀致しました。私は「懺悔錄」によつて始めて阿闍世王を知りました。王の經歷は他事とは思へません。罪業深重のこと、病苦懊惱のこと、救濟のこと、無根信のこと、何一つ符節を合する樣て恩師御實驗の法悅を深く喜ばせて頂きました。何度くりかへしましても盡きぬ味が含まれてゐます。此年てありましたが、清澤先生の精神講話を持つて本屋が參りました。それから仝先生の御本をも讀ませて頂きました。以上三恩師は私にとりて唯の御方々とは思へません。

大聖おの〳〵もろともに　凡愚底下の罪人を
逆惡もさらさぬ誓願に　方便引入せしめけり

それから近角恩師が御西下なさる事が時々の求道誌上に載つて居ますので、どうかして御眼にかゝる機を得たいと思つて居ました。ことに前任地が大垣驛近在てありましたので前から御願をして置いてせめて停車時間なりとも御話を承りたいと始終思つて居ましたが遂に御緣がありませんでした。

いつ頃からてしたか近來こんな考が芽を出して參りました。それは、自分の樣な罪のふかい何一つ善をなすことの出來んものが日々の職務の上から兒童に對して「かくせよ」、「かくあれ」と授けねばなりませんのてこれが誠に苦しい事、今一つは、そんなに思つて居ながら、まだ理想實現の根が枯れてゐませんので、どうかして家庭をよくしよう、妹を立派に躾けようと思ひます。けれども自分に何一つ出來んのにそんな事の出來る筈はありませんので、我兄弟さへ感化し得ないものが人の子を敎育することは到底不可能てあると思ふ事、これらの點から結局敎師を早晩止めなければならんと考へ出したのてあります。漸次煩悶の度が加はつて來るので恩師の當地御傳道前はその考がよほど高潮になつて居ました。然るに本年三月中旬圖らずも當地へ御傳道なさる事を承り眞に歡喜の思を致しました、嬉しくて眠られず、御自作の信仰上の詩を御示し下さつたことを夢みた夜もありました。四日間の御傳道は果して唯事てはありませんでした。誠に私一人の爲の大悲の善巧と有り難く思ひます。それは恩師が太田に御傳道の當日、前述の煩悶に付て御敎化を得たいと思つて參つたのてありました。途上本年の「求道」第二號の社說「無礙の一道」を拜讀しつゝ參りました。讀んて行く中に氣付かして頂きましたのは、蓮如上人の「當流の安心のおもむきは、あながちに我心のわろきをもまた妄念妄執のおこるをもとゞめよといふにもあらず、ただあきなひをもし奉公をもせよ、獵漁をもせよ」それからてあります。「かゝるあさましき罪業にのみ朝夕まどひぬるいたづらものをたすけんとちかひましますの彌陀如來の本願にてまします。」恩師はこの次に「我々の爲す所、政治てあれ、實業てあれ、かゝるあさましき罪業にのみ朝夕まどひぬるいたづらもの也。是聖人が悲嘆述懷したまへる點」と御示し下さつてあります。かゝるあさましき罪業にのみ朝夕まどひぬるいたづらものはだれあらう自分てあつた。自分で實行の出來んことを他人にかくせよと敎へなければならず。兄弟を感化し得ないのに他人を敎育せなければならない淺ましい罪業にのみ朝夕まどひぬるいたづらもの、私に、御親はたえず矜哀の熱涙をそゝぎたまふのてあつたと知らして頂きました。恩師に御目にかゝつて此事を告白致しましたら御忙しい所を懇々とこの味を御示し下さいました。この御慈悲を忘れて現在の職を止めようなどゝいふのは誠に勿体ないことてありました。

猶御傳道中撰擇本願に付て承りました。子のための親心に着せたい着物の數々をたつた一つえらびとられた手織縞の御話てあります。私は言つて見ようの無い不孝者て、かつても母が心づくしの手織縞を氣に入らんとて餘り着ませなんだので今は母がそれを自身の着物に仕立直して着て見えます。御講話中それを思ふていたく感にうたれまして恩師に告白致しましたら機にのみ眼をつけて嘆かず、かゝる罪惡の我等を救はんと誓ひ給ふ本願を歡べとの御敎化てありました。これから少し現在の心もちを申さうと思ひます。日々の日暮しが惡念惡想の起るばかりて邪見驕慢言ひ樣のない心て御座います。「濁世の起惡造罪は暴風駛雨に異らず、」「惡性更にやめ難し心は蛇蝎の如くなり。」私の心そのまゝをいひあらはして下さつてあります。もう何ともかんとも仕樣がありません。「極惡深重の衆生は他の方便更になし」他の方便更に無しとはまことによくも私のこの仕樣のない心もちを道破して下さつた。(私はどうも機を嘆くことが多い樣て恩師の御敎化は丁度適中して居りますので有り難いと存じて居ります。)しかし、忘れ勝にも思ひ出させて頂くのはその私を「しかるに佛かねてしろしめして煩惱具足の凡夫とおほせられたることなれば、他力の悲願はかくの如きのわれらがため」てあるといふことてあります。「かゝる淺ましい、」いたづらもの、「かくの如きわれ」を攝取したまふは何といふ廣大な御慈悲てありませう。

觀音勢至もろともに　慈光世界を照曜し
有緣を度してしばらくも　休息あることなかりけり
弘誓のちからをかふらすば　何の時にか娑婆をいてん
佛恩ふかくおもひつゝ　つねに彌陀を念すべし

これて一通り告白させて頂きました。長くなりまして誠に申譯が御座いません。私の樣なものがかような告白をさせて頂く樣になりました不可思議の恩寵と、近角恩師の御高恩とを感謝致し、なほ未信の御方が早く信仰の門に入りたまふ樣に希望いたします。南無阿彌陀佛。

煩惱にまなこさへられて　攝取の光明みざれとも
大悲ものうきことなくて　つねにわか身をてらすなり

一、壽命は佛法のためなり。五歲て死するものあり。十五二十て死するものあり。それにたくらぶれば、後世は大事と心づく迄の命を得て、佛法廣佛致すことになつたは、大なる喜びなり。もはや壽命の役目は相濟んだと思へば心安樂。

一、寶は念佛にあり。現世に無量の德を得て、後に淨土に生るゝ因となる、功德このうえなき寶は、南無阿彌陀佛なり。この念佛を稱へられぬ身の上もある。然るに、朝から晚まて稱へても差つかへなく、笑ひそしる者もなし。よく〳〵の御慈悲なり。深き宿緣なり。生死をはなるゝ時節到來と思へば心安樂。

(香樹院語錄)

慚愧賀慶

小野島覺哲

一

拜啓仕候。時下不順の候に御座候處、尊師愈御法体御清寧にて、日夜御行化被遊候段慶賀之至に奉存候。陳者求道誌上に於ては尊師の御愛樂遊はされ候无上の大法の妙味を屢々御分與被成下、海岳の御高恩と奉深謝候。愚生は尊師の御尊容には未た一度も拜謁を遂け奉らざるものに候へとも、尊師の愛樂し玉ふ他力信仰の妙味を誌上にて拜讀仕候て、其信仰の一味なるところを崇敬致し居る者に候。小生は今や碌々として光陰を費消し、三十六歳に達し候が、今より十五六年前即ち二十一歳の頃より信念の必要を感し、六年間の苦悶を經て二十六歳の頃より漸く佛陀の在しますに氣付き、いつとなしに苦悶を去り、今日迄不斷光の御守護によりて信心相續罷在候者に有之候。然而苦悶中の心狀は實に誌上告白欄に諸法兄姉の述へ玉ふと同一轍にて、又尊師の示し玉ふ如く、或は人生を目的として信仰は一の手段のことくになり全く佛意とは反對の方向に奔走し、或は教語の一端に執して徒に自己を苦しめ、苦悶の餘り死せんかと思ふことも屢々有之候ひしも、死を取りつむれば未た信仰に至らざるか故に未來の問題茲に生し來りて、死するには死なれす生くるには生きられさるの境に住し、其苦しかりしことは同し徑洛をたどりし者の外は到底知り難きことに有之申候。其間に亦人事の問題家庭の波瀾をも加へ來り、云ふべからざるの慘況に呻吟致し候も、一たび慈光に接し奉りし刹那、茲に人生と未來との解決はつきて至安至樂の境を生し來り候。其より以來今日に至るまて起惡造罪は暴風駛雨のごとくに候へとも、常に佛陀の護念によりて安慰せられ今日迄相續し來り候。如何なる宿緣にて候や、今は唯た西岸に向ひ一佛に歸し、一行相續にて何不足なき仕合に御座候。嗚呼大なる哉悲願の信樂、无智愚昧の我等罪障深重の身をして長夜の闇を破し、涅槃の無上道を開示し玉ふ。何の多幸か之に加かんや、謹て啓す。慚愧々々。南無阿彌陀佛。

述懷

一入心光裡。身心自豁如。痴雲雖時起。惠日能消除。

仝

一心向西方。一行念彌陀。阿彌陀與我。三業不想他。

悲嘆

黑谷門中有貴禪。深傳與義信爲先。星霜遠隔遺遺法。
合掌望西慶宿緣。

仝

穿々小見詎足論。滔々學世名利奔。自損須懼損他咎。
道俗如今醉夢昏。

御無禮をも不顧愚の著作を錄し告白の一端に供申候。無慚無愧の至り、恐縮の外は無御座候。

求道誌上に付色々御指導蒙り候は一々御禮申盡し難く、皆な尊師の至誠心より迸りたる言々句々如來の御使命と仰き、師主の恩德の深さ、唯々御名を稱へて報し奉つる外に此身に於ては何事も出來不申候。

追白(中略)以上申上候事爐邊に再考仕り候へは、皆な東岸中の虛言に御座候、茲に謹て西を望みて座し、南無阿彌陀佛と申して取消し懺悔仕候。虛言たわことの我れにあらはれ玉ふこの南無阿彌陀佛のみまことゝ承り候。南無阿彌陀佛〳〵。

にしむきのこゝろになればいふことの
たゞひとつあり南無阿彌陀佛。

念佛のほかはそらごとたわごとゝ
いふはまことのさんげなるらん。

賢哲愚夫もえらばれず、豪貴卑賤もへだてなし。

二

尊號求道誌第五卷第十號雜錄欄に實驗の信仰に付ての御示し一部始終實に感嘆を極め、無上の法味に浴し奉り候。殊に(三)人生の實行の下に無抵抗的心情につき左記の御言葉、實に〳〵心魂に銘して喜び入り申候。眞に躍り上るほどに嬉しく候。「人生上他人の如何に依て他人に對する思想は破れて、唯佛陀と我のみを眺むる樣になるのである。乃至眞に大慈悲なる心に依て我が攝取せらるゝと同時に、我又彼大慈悲に融和して、所謂無碍の境涯になるのである。無碍といふは即ち眞に無抵抗的狀態である云云」と御示の段一しほ難有奉感入候。是れ實に祖師聖人の「稱ふれば佛も我もなかりけり、南無阿彌陀佛の聲のみぞして」と咏じ給ふ妙境として、小生も先生と同じく此境に御引入れに預り申候事、何たる佛陀の恩過ぞやと、人生茲に至りて十方無碍、抵抗する我もなく、抵抗せらるゝ彼れもなく、眞箇に滿足の境に轉化し奉り候。昔し住蓮安樂の大德が斬刑に遇ひしとき、眼中自己なく唯佛陀の聲に融和し、盡十方唯御佛ある斗りにて、眞の無抵抗的狀態なりしも全く今の先生の御示しの處と符合致し候歟。時を異にし人を異にするも、十方三世無碍光佛の威德廣大の御利益は內的實驗に鑑みて同一味なること、佛願の大恩驚嘆の外は無御座候。先生私は五欲妄念邪惡極りなきものに候。唯不思議にも御同緣を頂きうれしさ禁じ難く、前生も後生も現在をもしらざる身に、佛智光の妙用として無始流轉、現に罪惡無常の身なることを信知せしめらるゝと同時に、念佛一法にて佛陀の御方より攝取し給ふことを了知せしめられて、大に須らく慚愧すべき曠劫以來の愚惡、否今も同じく愚態を演じつゝあるを、大に御佛けに慚謝し奉る處に御座候。

先生の御示しの余りに〳〵難有さに、御禮の言葉愚かなる文もて唯申上奉り候。何卒淺間敗身を御憐念可賜候。敬白

過し世の緣しはこゝにあらわれて
眞の知識にあふぞうれしき

三

拜啓「求道」第五卷十號に御示しの如く、我々信を得し身は一面廣大勝解者の御嘆賞を蒙ると同時に、一面には我等愚痴身曠劫來流轉の者なることを佛智より直覺的に觀ぜしめ下され、誠に底下の凡愚なることを信知せしめらるゝと同時に、大に須らく慚愧すべき身なることを知り、言語に盡しがたきほど慚謝の念を湧き起すものに御座候。實に平々凡々の愚夫なることを知るときは、底きも底きも千尋の谷底に居ることを自覺し來り、善導大師のゝ給ふ如く、慚賀す釋迦恩のところに同感を生じ來り候。他力回向の信樂は極めて高き廣き大な

る賀慶の心を生ずると同時に、佛智に照破せられてこゝにいひつくしがたき慚愧の念を生み來り候て、たとひ聖教を讀みものをしり法味を愛樂すとも、我の素機に氣附くときは一文不通者と何ぞ異らんや。否彼人等と同境に居ることを自覺して、大なる卑謙を生じ來り候事、只た〳〵佛願佛語師教の御恩遇と頂く斗りに御座候。正眞の心にして邪僞雜ることなしとは此心相をの玉ふことにや。現在に今筆をとりつゝあるこの身このまゝ佛智光に照さるゝときは慚愧すべき愚境に御座候。求道に信心を得て平凡となりたのてあると御示しの段、千古不磨の金言と奉仰候。俯して常に慚愧をいだき、仰て佛恩を感謝するのみに御座候。御回向の信心念佛をこそ廣大勝解者とはの玉ふらん、これぞ歎異鈔ならん、祖師ならん。回向の心行より仰げば此愚蒼無智の我等に、寸分も祖師とかわらざる同一の念佛を賜はり、祖師と御同緣を喜ぶこと、偏へに祖師矜哀の御引入と思へば、信じて念佛し西方に手向する今の境遇に住せしめられたると、この外に人生何の喜びか候はん。この喜びを賜はると同時に、俯して此身をみれば、現に是れ罪惡生死愚痴無智を慚ぜしめられ、遠く曠劫以來の罪惡の慚すべきこと、(佛の知見に對して、)そのうへに久しく佛願をしらざりしこと、永く助正間雜定散心雜はりて、出離其期なかりし事を慚謝を生じ來り候。是れ偏へに我の目出度きにあらずして、我は如來の御恩の高きをも、我の罪惡の深きをもしらざる迷惑のものに候に、御回向の信樂の妙力として、棧を愧ち情を慶謝するの念を生ずること、佛願の賜物、廣大の心行と仰ぐ斗りに候。求道は實に是れ先生の歎異鈔を體現あらせらるゝ處、機法を慚賀し玉ふところと奉仰上候。誠に我身は現に今此身を慚ぢ、攝取の佛陀に向ひ一言半句も謝し得ざるものに御座候。かゝる身を攝持し玉ふ弘誓の洪恩、念佛の外謝する道も無御座候。先生の御意見、否如來の御說誡を蒙りて、自己を常恒に慚愧すべき斗りなるを氣附かせ下され候事、偏に是れ如來眞師の矜哀なりと念思仕候。

猶々昨夜は一時頃迄攝取不捨に就ての御教誨を熟讀玩味仕り、慚賀の念を生じ申候。喜びに偏し候ときは知らず〳〵の間に自負的相對的に陷るやの大誤失を生じ候樣に感ぜられ申候。しかれども佛意正直にして自己としては唯一慚愧あるのみに氣附かせ下され候て、歎喜賀慶の心、慶喜樂の心を生ずる裏面には自己の慚愧するに處なきを佛智より照し貫かれ候事、只此外は思ふもいふもそらごとに候。唯一佛智あるのみに候。されば念佛の外はそらごとにて候、みな誤りにて慚づべきの至りに候。申盡しがたく候。心得の行屆かざる點幾重へも御教諭を賜度候。

敬白

四

拜啓仕候、過日は御丁寧なる御狀賜はり忝く拜誦仕候。尙又尊著人生と信仰御贈與被成下忝く頂戴仕候。御狀中に御示しの如く我々は人生にあらんかぎりは飽までも有碍の者に御座候へども、常に西方不可思議尊の御計らひとして無處障礙の利益を施こし給ふを仰く斗りに御座候。歎異鈔に示させられ候。「淨土眞宗は今生に本願を信して、彼土にして悟りを開く」との御示し、又「盡十方無碍の光明に一味にして一切衆生を說法利益せんときにこそさとりには候へ」のごとく實に人生に

あらん限りは有碍の者に御座候。

日々の日暮しは常に貪瞋痴の三毒をもとゝし、十惡斷じがたき身にて候を哀れみて、時に智光に徹入せられ、此無明罪惡の肉團闇心の中に、究竟の慚愧心を生ぜしめ給ひ候事、實に不可思議と仰く斗りに御座候。

されど水火二河の御示しの通り、貪瞋常に蔽ひて矢張無慚無愧に復し申候事、愈々極重の至惡人に御座候。斯る身に成じ給ひし佛德不可思議なるを仰く斗りに極まり申候。

無慚無愧の我れにはまことは微塵も無御座候へとも、これを慚愧せしめ給ふ御惠みこそ眞實の御塊まりと奉存上候。機法慚歎二種の妙用を放ち給ふ佛智のそのまゝあらはれ給ふ御名のみ眞にてはおはしましゝと仰く斗りに候。

若し無明長夜の人生に他力信心の淨摩尼珠なかりせは此穢身は穢土を出てずしていかでか光明の人生を出現することを得候べきや。一家の和合も一國の安穩も光明の廣海に浮び至德の風靜ならざるかぎりは、衆禍の波いかでか轉じ候へきや。末代の阿闍世は即ち我にて候。末代の韋提は我母にて候。歎異鈔に御示しの如く信心の行者はわざと好むにあらざるも、自然に緣にあへは腹をも立て候へども、かしこき思ひを具せずして佛陀を念ずるところに柔和忍辱の利益もいてきて、一家の和樂もこゝに成ぜしめ給ふこと、いかなる大利益にておはしまし候や。私は先生に謝し奉らねばならぬ事が御座候は、人生の迫害は我業障であるとの御示しと(高祖日野門前の事實及流罪のときの御述懷)信仰前後に渡りて我身の身邊に現れたる順逆は、みな大悲善巧の御方便であるとの御示しにて候。大悲善巧方便の御言葉はたゞ御言葉として讀みておりたることの淺間しく候。兩三年前の求道誌上に(感謝欄)入信の人が自己を緣として出來しときは、一點も私をさしはさまずして御佛の働き給ひしを氣附きて、歡喜の涙にむせぶとの意味を御記し有之候ひしを見參らせ候て、自己の實驗と同一味なるを喜び申候。尙又教行信證其外一切の聖教は、みな信仰の實驗實事實感なることを御示し下され候を感謝し奉り候。信仰の眼を以て佛語を聽くのこゝろに住し拜誦し奉り候ときは、撰擇集を拜しても祖師の御感嘆に御同感申上候事が出來候事不思議に御座候。又信仰の上は同朋に對し聖教に向ひ、色々の實感を生じ來り候へとも、これを文に殘し下されずば後世に傳はり不申、此點に於て我々の不勉強と不文とを恐れ入る計りに御座候と同時に、先生に御厚恩を感謝し奉り、前上御禮申上候。先生の御示しの御法語は一々佛陀の御示導にあらざるものは無之候。實に持名鈔最終の御文の如く他力の大信心を得たる人は其內證如來とひとしきいわれあるゆへに、師の恩は即ち如來の御恩にて候。長々と下らぬことを定らぬ筆蹟にて申上候事、恐縮の至りに奉存候。

追申。愚生如きものは古しを慕ひて行及ばざる心と口の人間にて狂者の徒にて候はんと奉存候。それにつき古德傳を拜し奉り候に、攝津にて聖覺法印の御說法のありし事記し有之申候を拜し奉候へは、御在世の盛んなりしこと想像も及ばざる程に候。今や義理觀念を旨として但信稱名の行者を頑固に排するものに有之申候。此點に於て選擇集の究竟一心一行本

願相應に住し、稱名の外はその他事をわすれたる愚痴にかえりたるところが、本願相應の究竟と奉存候へは、今時の衰微は實に學問して念のこゝろをさとり、助正顚倒して一心一行に滿足安住する人の少なき、われらか念佛せざるはかのいへの荒廢なり、われらか欣求せざるはその土の愁涙との御示しをおもへは、實にありがたくも有之恐れ入る計りにも有之申候。尙又祖師撰擇集を書寫し玉ひて

誠是希有最勝之華文乃至專念正業の德決定往生の徵とのたまひしも、其御時代につきて考へ候へは、聖道の宗師の種々に謗難を擇集に對しなされたるなかに、今之を寫すはひとへに助業までもさしをきて、一心一行の本願を順行惠念正業する身となりたればこそ、決定往生の身となりたればこそ、侮りて破釋までもかくひとのあるなかにこれを尊崇して書寫するはと、御喜びなされしことの樣に窺はれ申候。先生の求道誌に、一行に滿足せざるは佛願の生起本末にそむくものであるとの御示しをいたゞき、選擇集及本典に想到致して、實に癈立の佛意を仰き奉り候。伏して慚愧を懷き、仰て佛陀の冥加をおもひつゝ、信仰的同朋の御中間に御入被下べく候。

頓首

慶讃

十七憲法

近角常觀

第二條

二曰、篤敬三寶、三寶者佛法僧也。則四生之終歸、萬國之極宗。何世何人非貴是法。人鮮尤惡能教從之。其不歸三寶何以直枉。

第二條は十七憲法に於ける眼目にして、眞諦第一義の信仰を正面より堂々と高く掲げて、萬靈人類の結局の依所を示し、世界萬國の平和の基礎を明らかにし、古今東西何れの人も何れの所も此の三寶によらずんば決して眞實清淨の絕對無碍の大道を見出し得べからざることを斷言したまひたるものにして、我日本帝國をして自覺せる信仰の立場に立たせたるものは實に此憲法の第二章である。聖德太子已後現代に至るまで古今幾多思想の變遷ありと雖、萬古渝らず眞諦第一義の信仰

確立し、發動して三寶歸敬の念篤き所以のものは、實に聖德皇太子の此不磨の聖訓に淵源するものである、歷史表面にあらはれたる事實に依れば信仰上に幾多の消長盛衰あるが如くなるも、是れ畢竟大海に於ける波瀾の起伏に過ぎずして、一たび日域大乘相應地と一乘眞實海に歸入したる日本帝國は遂に三寶の慈悲を出づることは出來ぬのである、嘗て島田蕃根翁の言はれたることがある、日本に於て排佛といふことは德川時代の中頃までは嘗てなかりしことである、如何なる儒者と雖、文學者と雖、武門にせよ、百姓にせよ、佛を崇めざるものはない、菅公にせよ、親房卿にせよ、楠公にせよ、家康にせよ、皆篤き信佛家である、從て、聖德太子を非議する如きも畢竟德川時代中頃已後の儒者國學者に至りて言ひ出したことで、夫迄の儒者でも、和學者でも皆信佛家である、しかるに今日では其樣な思想が古よりありたるかの如く考へて居るものゝ多きは大なる誤であると申された、如何にも至言である、維新當時一部に行はれたる排佛毀釋の如きも唯其余流を汲めるものゝ一時の曇に過ぎなかつた、而して今や明治時代の文明の曙光世界を照すに至りて忽にして皇太子の眞面目は輝きて來りたのである、維新已後漸く宗敎の忽にすべからざるを悟り來りたるも、未だ眞に三寶の恩澤を味ひ、其光明を自覺するまでの氣運は來らなかつた、夫がため宗敎は大切である、信仰は必要であるとまでは分つたが、佛法でなければならぬ、三寶を歸敬せねばならぬ、佛を信仰せねばならぬ、と堂々と確信斷言する氣運は來らなかつた、夫故從て聖德太子が憲法の上に堂々と篤敬三寶と書せられたのを見て、恐くは之を尊崇するといふよりは幾分か頑固であるかの如く見えたであらう、勿論佛敎者が自分の立場の上より、之を揚言したことはあろうが、未だ一般國民の立場として、國として絕對に三寶に歸依せねばならぬといふ自覺を生ずるに至らなかつたのである、併ながら、今や時運正に來りて、各個人が人生に煩悶懊惱し、國としては二十世紀の國際問題に苦み、社會としては經濟問題に爭ひ、終に茲に絕對の光明を認め、三寶歸依の地盤を確立すべき時が到つてある、此に至りて此憲法第二條は天日の煥として萬古赫々たるが如きものである。

世に聖德太子五憲法と稱して行はれてあるものがある、文章を見れば僞作たるとは疑ふべからざるもので、今此に之を辨ずるの要を見ぬものである、唯一言したきは古來佛者などが之を信じたものらしいが、以て如何に佛敎者自身までが十

七憲法の三寶歸敬の絶對的立場を十分了解せざるかを見るべきである、彼五憲法には眞の十七憲法を通蒙憲法と名け、第二條を略し、其代りに第十七條に篤敬三法三法者儒佛神也云云と云ふてある、而して通蒙憲法已外に政家憲法、儒士憲法、神職憲法、釋氏憲法各十七條を作りてある、固より論ずる程のこともなけれども、世諦經營の根本たる眞諦第一義の三寶歸敬を刪除して、佛敎を他の儒道、神道と並立して擧げたなどは、恐くは皇太子を廣き意義に持來すために作りたることなれども、全く皇太子の眞精神を壞し了して居る、何れの時代の作かはしらねども、所謂神儒佛三道鼎立の思想の產物である、此の如く三道並立と見るときは廣き樣なれども絶對唯一の佛道を認めぬのであるから眞諦第一義の立場を見出したとは言へぬ、現今でも儒も可也、神も可也、佛も可也と云ふ樣な立場では如何に佛を認めても何にもならぬ、此の如き立場は亦時代によりては必す、佛敎可也、基督敎可也、マホメット敎可也、と云ふやうになるであろう、此の如きは眞の三寶歸敬の人といふことは出來ぬ、又通蒙憲法とか、政家憲法とか云ふ樣に、世諦の經營が眞諦信仰の外にあるかの如くなるならば、其世諦は甚だ好ましからぬ世諦である、即信仰なき政治、信仰なき社會を認むることになるから、結局眞諦世諦の關係に於ても絶對の立場を見出さぬことになる、五憲法の眞價は辨ずる必要を見ざれども、現代に於ても通漫なる三道鼎立思想やら、又淺薄なる諸宗敎歸一說の如き皆此三寶歸敬の絶對信仰の精神を得ざるものである、吾人は此點に於て、親鸞聖人の信仰が如何に皇太子の眞精神を發揮せられたかを見るべきである。

化身土卷末に曰く、夫據二諸修多羅一、勸二決眞僞一、敎二誡外敎邪僞異執者一、

涅槃經言、歸二依於佛一者、終不二更歸一依其餘諸天神一、

般舟三昧經言、優婆夷問二是三昧一、欲レ學者、乃至自歸二命佛一、歸二命法一、歸二命比丘僧一、不レ得レ事二餘道一、不レ得レ拜レ於レ天、不レ得レ詢二鬼神一、不レ得レ視二吉良日一。又言、優婆夷欲レ學二三昧一、乃至不レ得下拜レ天祠中祀神上（中略）

首楞嚴經言、彼等諸魔彼鬼神、彼等群邪亦有二徒衆一、各々自謂成二無上道一（乃至）成二愛見魔一失二如來種一。

灌頂經言、三十六部神王萬億恒沙鬼神、爲二眷屬一、陰レ相番代、護下受二三歸一者上

地藏十輪經言、具二正歸依一、遠二離一切妄執吉凶一、終不レ歸二依

邪神外道一。又言、或執二種種、若少若多、吉凶之相一、祭二鬼神一、乃至而生二極重大罪惡業一、近二無間罪一。如是之人、若未二懺悔一、除二滅如是大罪惡業一、不レ令二出家及受二具足戒一、若令二出家或受二具足戒一、即便得レ罪。

集一切福德三昧經中言、不レ向二餘乘一、不レ禮二餘天一。

本願藥師經言、若有二淨信一、善男子善女人等一、乃至盡形不レ事二餘天一。又言、信二世間一、邪魔外道妖孽之師妄說一、禍福便生、恐動心不二自正卜問覓一レ禍殺二種種衆生一、解二奏神明一、呼二諸魍魎一、請二乞福祐一、欲レ冀二延年一、終不レ能レ得、愚痴迷惑信レ邪倒見、遂令二横死一、入二於地獄一、無レ有二出期一。乃至八者横爲二毒藥厭禱呪咀起屍鬼等之所一中毒。

菩薩戒經言、出家人法不下向二國王一禮拜上、不下向二父母一禮拜上、六親不レ務、鬼神不レ禮。

佛本行集經第四十二卷優婆斯那品言、（前略）向レ見而說レ偈言、男等虛祀レ火、百年亦復空、修二彼苦行一、今日同捨二於此法一、猶如二蛇脫一於故皮。（下略）

起信論曰、或有二衆生一、無二善根力一、則爲二諸魔外道鬼神一所二誑惑一、（中略）外道所有三昧、皆不レ離二見愛我慢之心一、貪二著世間名利恭敬一故（中略）

辨正論曰、大經中說、道有二九十五種一、唯佛一道、是於正道、其餘九十五種、皆是外道、朕捨二外道一、以事二如來一、若有二公卿一、能入二此誓一者、各可レ發二菩薩心一。（中略）

天臺法界次第云、一歸二依佛一、經云歸二依於佛一者、終不二更歸一依其餘外天神一也、又云、歸二依佛一者、終不レ墮二惡趣一云、二歸二依法一、謂大聖所說、若敎若理、歸依修習也、三歸二依僧一、謂歸下心出レ家三乘正行之伴上故、經云永不下復更歸中依其餘諸外道上。（中略）

源信依二正觀一云、魔者依二煩惱一而妨二菩提一、鬼者起二病惡奪二命根一。

論語云、季路問、事二鬼神一、子曰不レ能レ事、人焉能事二鬼神一。

二三の文を擧ぐれば事足るなれども、親鸞聖人が佛敎其物を如何に見られたかといふ事を窺ふに最も適切であるゆへに煩しきを厭はず、引用したのである、即ち聖人は三寶歸敬を以て佛敎と外道との左右に分るゝ點と見たまふのである、正道と邪敎との分るゝ點と見たまふのである、眞宗と僞宗との分るゝ點と見らるゝのである、眞實三寶に歸敬するものは天神地祇を初めとして如何なるものにも歸依すべきてはない、否

眞心三寶に歸依するものならば他に歸依すべき心の餘地を見出す筈はない、天地日月星辰をも祀るべき必要もなく、曆數吉凶禍福を見るべきでない、而して三寶已外たとへ國王父母六親に至るまで我等が信仰上の依處とはならぬのである、況んや當時大に行はれ、今も大に行はれつゝある鬼神を祭り、卜筮、祈禱、厭呪、皆苟も三寶に歸依しつゝあるものゝ心に入るべき筈でない、況んや加持祈禱とか終驗斗藪とか云ひつゝあるも畢竟事火外道苦行外道の再演に外ならず、藥師地藏を信ずるつもりで畢竟邪神惡魔に事ふることになつて居る、藥師も地藏も灌頂經も菩薩戒經も結局三寶に歸敬することを敎ふるが佛敎の本意である、鬼神に事ふる如き孔子尙人道にあらざることを極言したまふのである。和讃に曰、

五濁增のしるしには、　この世の道俗こと〳〵く、
外儀は佛敎のすがたにて　內心外道を歸敬せり。
かなしきかなや道俗の、　良時吉日えらはしめ、
天神地祇をあがめつゝ、　卜占祭祀つとめとす。
僧ぞ法師のその御名は、　たうときことゝきゝしかど、
提婆五邪の法にして、　いやしきものになつけたり。
外道梵士尼乾志に、　心はかはらぬものとして、
如來の法衣をつねにきて、一切鬼神をあかむめり。
悲しきかなやこのころの、和國の道俗みなともに、
佛敎の威儀をもとゝして、天地の鬼神を尊敬す。
五濁邪惡のしるしには、　僧ぞ法師といふ御名を、
奴婢僕使になづけてそ、　いやしきものとさだめたる。
無戒名字の比丘なれど、　末法濁世の世となりて、
舍利弗目連にひとしくて、供養恭敬をすゝめしむ。

明らかに當時の佛敎が三寶の眞髓を傳へずして、其內容は外道となりて居る、既に佛を信ぜず、從て眞の解脫涅槃の法に非ずして良時吉日卜占祭祀の邪法を奉し、僧自ら既に僧に非ず、身に法衣を纏ふも心は外道なり、夫故世俗一般僧とか法師とか云ふ名を賤しみて奴隸視して居る、是にて佛法僧に歸敬すとは云ひ難しと戒めたまふ、是恐くは親鸞聖人の時代のみならず、現代も亦然りである、猶一言注意すべきは聖德太子を尊崇するの人が皇太子の眞意は在俗宗たるかの如く極言して僧侶を尊敬せざるやの弊がある、皇太子其師慈惠慈便を尊敬しは法隆寺の寄附にせよ僧寶を貴びたまふのである、皇太子の本願は三寶興隆三寶紹隆である、勿論如來の法衣を纏ふて鬼神を崇む僧を尊敬せよとは仰せられぬが、たとひ無戒

名字の比丘と雖、苟も三衣を纏ふて佛に事ふるものは末法五濁の世となりては、舍利弗目連の如く尊敬すべきである、言を換へて言へば現代の如き頽りに哲學的論議的に佛敎を研究するも眞に佛陀を信じて之を尊崇することなく眞に法の尊き恩澤に俗して法悅の境に入ることもなく、又信仰を確立し、人生に光明を與ふる僧侶の人格を重んずべきこともなく、又自信するもの少し、自ら侮りて、人之を侮る、他の之を敬せざる亦怪しむべきではない、聖人は非僧非俗の一愚禿として生活したまひ剃髮染衣のそのすがた、たゞ世俗の群類に心同し、我名字を釋氏にかくるといへとも、こゝろ俗塵にそみて智もなく、德もなし、されど袈裟はこれ三世の諸佛、解脫憧相の靈服なり云云、自ら身を卑ふしたまふも僧寶を貴みたまふことは、皇太子同樣である、宣なる哉却て健全淸操なる家庭的宗風を興したまふたる次第である、此の如くして事實に於て皇太子の三寶興隆の眞髓を發揮したまひたのである、これ聖人か眞宗と名づけたまひし點である。

かくの如く三寶歸敬を以て佛敎外道の分岐點として見るといふ點は明らかであるが、其三寶歸敬といふ內容夫自身は如何といふ問題が殘されてある、抑々歸依佛、歸依法、歸依僧は佛成道後、佛門に入るものゝ告白作法にして實に佛徒たるものゝ根本義である、故に一代經多しと雖、亦佛弟子多しと雖其信念は之より已外に出る事はない、爾來佛滅後二千年來の佛敎を興隆したまふにも亦三寶歸依の外はない、此の如く考ふる時は三寶歸依といふ事は頗る廣漠たる者にして今日世人の所謂通佛敎的の者にして、各宗共通の敎理たるかの如き感を抱かしむる事になり安い、是大に誤り安き點である、成程廣義に於て各宗皆三寶興隆より起りたとは言ひ得るとてあろう、然れども、各宗共通といふべき者ではない、共通と名けらるべき敎理なる者が存在する筈はない、各宗と雖も各々其三寶を信仰歸敬したる實質に外ならぬ、併各宗夫自身の信仰已外に全體通佛敎として存する筈がない、各宗皆釋尊を尊敬せざる者はない、然れども各其所信より歸依するのである、其所信已外に通佛敎の釋尊の存する筈もなく、全體通佛敎といふ信仰の存する筈がない、其如く聖德太子は通佛敎の敎主といふ事でもなく、隨て皇太子の興隆されたる三寶は通佛敎といふ筈はない、しからば皇太子の興隆されたる三寶即宗旨は何であるかといふに、皇太子の佛敎に宗旨はない、恰も釋尊に宗

旨なき如く、皇太子に宗旨のある筈はない、勿論皇太子の御覽なりし經文や、僧侶に三論宗研究の人は多かりしも皇太子の信仰其物は決して支那の三論宗であるといふとは出來ぬ、しからば皇太子の三寶歸依の内容は如何、即ち皇太子の信仰は如何といふ問題が存してある、是即ち釋尊佛敎の眞髓は如何といふ問題が宗旨を生み出したるが如く皇太子の三寶歸依の信仰は如何と云ふ問題が、遂に宗旨を生み出したのである、是れ皇太子と法然上人を通じて佛敎の眞髓を味ひたまひたる親鸞聖人の眞宗を生み出したのである、しからば聖德太子の大乘佛敎南無佛南無法南無僧が如何にして南無阿彌陀佛の誓願一佛乘を生み出したかが至要中の至要の問題である、是即ち聖德太子の眞諦第一義を闡明する所以である。（此條未完）

紹介

◎學修法

澤柳　政太郎氏著

本書は澤柳氏が其の多年の經驗上より現代學生の學修法に頗る拙劣なるを遺憾として、特に學生の爲に自ら率先して學修の方法を講述せられたるものである。蓋し教育の設備は如何に完備し、教授法は如何に講究せられても、學生自身の學修法にして其の道を得ざる時は、學生自身としては最も貴重なる可き學生時代を空過し了る而已ならず、折角の教育機關も死んで仕まう譯である。此の點より言ふ時は此種の研究は疾くに起る可き筈のものであつたのである。爾るに從來我國に於て眞に眞地目なる此種の研究の起ら無つたのは何故であつたか。吾人は今此の貴重なる述作に接して切に此の感を深くすると共に、現代教育の爲に一新生面の開拓せられたるを慶ぶ者である。蓋し此の着眼は我國に於て新機軸の著作たるのみならず、泰西に於ても教育學の研究は盛なるも此種の企がなかつたのを遺憾として此創始の業を企てられたのである。本書の目的が既に茲に在る上は、其内容の如何に眞摯熱切のものであるかは言ふ迄も無い。緒論「學修法總則」「知識の修得」「德性の修養」「身體の發育」「專門學科及び職業の選擇」の六章に分けて、注意、思考、讀書、觀察に對する用意を初め、試驗、落第、生活、交友、職業の選擇殆んど學生としての心得べき總ての要項を網して最も穩健公正親切に說かれてある。而して此等の事項が學生たるものが常に他に問ひ質さんと欲する點に向て懇切にして同情の厚き忠言たるのみならず、學生自身は氣附かず、又反對の方向に走りつゝあるものに向て正鵠なる道路を示す指南車である。實に是れ氏が多年教育の要路に在りて經驗考察せられたる結果たらざるは無い、此の點に於て世人は近時流行の所謂成功法的著作と同一視してはならぬ。吾人は學生には無論の事、學齡子女を有せらるゝ父兄、並に直接教育の任に在る教師諸君にも本書の必讀を勸告する。必ず子弟並に學生の教養上に就き新なる光明を發見せらるゝに相違無いっ吾人は澤柳氏が飽迄教育を思ひ學生を愛せらるゝの深きを感謝する者である。

《定價八十錢　發行所　東京神田　同文館》

◎信仰五部書

浩々洞編

本書は親鸞聖人遠如上人等の御遺訓たる『歎異鈔』『末燈鈔』『御消息集』『御一代聞書』『安心決定鈔』の五書を謹纂せられたる者である。此の五書が他力信者の一日も手を離す可らざる寶典なる事は言ふ迄も無いが　從來世に行はれた他力の聖典は何れも雜然として取扱に不便なのが少く無つた。茲に於てか最も目拔きの右五書を選んで、携帶に便利なるやう作られたのが本書である。之ならば常にポッケットに收め、電車中でも散歩中でも拜見する事が出來る。

《定價六十錢　發行所東京巢鴨、無我山房》

時報

求道講話の近況

新綠薫窓として天地清新の氣を以て滿たされ、莽木花咲きて蘭林さながら樂土の想あり、例年四月一たび地方傳道の途に上りしも本年は三月に繰り上げしかば、四月五月の交專ら首都に止りて在京の御同朋に接して、共に大悲の恩寵に浴するを得たるは最も感謝に堪へざる所也、求道學舍の日曜の曉、庭園の青楓綠滴んとするの處遠近の御同朋、參集したまひて常に堂滿ち二時間已上の講話深く大悲の光明を仰ぎ、信樂の法を滌ふ、歡喜稱名の聲室に溢れ、圓融和樂の情其面に浮ぶ、講話終りて膝を交へて所感を語り、共に感謝の辭を爲す、殊に信仰談話會の當日の如きは新に氣附きたる大悲の惠みをたゞえ、痛切なる告白、人をして共に佛陀の恩寵に泣かしむ、又第二求道會の如きは新に道を求むるの人、何れも眞摯謹嚴の態度を以て切實一點の餘裕なし、而して近時最も多數の來會を見るは以て如何に機緣の熟せるかを見るべし、而して一たび如來の慈光に接して號泣止むあたはざるものあり、個人として來舍求道せらるゝものあり、其他諸種會合に於て個人家庭に於て、求法聞信の人多きは皆如來無碍の光澤と謂つべし、南無阿彌陀佛。

清澤師七回忌

清澤先生世を去りたまひてより既に七星霜を經るに至りぬ、六月六日は正に其七年忌祥月命日に當る故に五六七日の三日浩々洞諸君の主催によりて眞宗大學、九段佛敎倶樂部、帝國大學講堂淺草本願寺に於て感謝講話を開かる事廣告欄に詳かなり、先生嚴父及令息を初め親友門弟遠近より來集せらるゝ筈也、吾人亦此神聖の法會に遇ふの恩寵に浴するを感謝し奉る、六日は恰も日曜日なるを以て學舍當日の講話、亦全く先生の在世を追憶し、其厚恩を感謝し奉らんとす、嗚呼先生は全く精神の人たりき精神の權化たりき、先生精神を以て生き精神を以て活動し、精神を以て淵默し、此精神を以て進み、精神を以て退き、此精神の爲に病を得、精神を以て命を終ふるに至れり、先生は此の如く精神を以て一生を終始し、猶永久此精神を遺して以て現代の光明とせられたり、吾人先生の在世を想起する毎に儼として精神の左右に磅礴たるを感ぜずんばあらず、先生の一代回想感慨の料たらざるなし、然れども吾人の最も感じたるは先生が最終行李を整へて將に三河に歸臥せられんとするや予先生を東片町の宅に訪ふ、談笑常の如し、辭するに及び先生予を戸に送りて莞爾として苦笑して宣く、今年は破壞年也、今春本山内局は破壞せり、我長子も破壞せり、我妻も破壞せり、而して今亦學校も破壞せり　予も亦久しからずして破壞せんかなと、以て先生の一代が此等幾多の破壞と戰ひ終へたる精神の歷史たるを知るべし、今や墓木拱ならむとして吾人遺弟坐食晏眠其志の萬一にも報ゆる能はず、洵

に慚死に堪えざる也、然れども吾人先生の指導により聖人の他力信仰を法味愛樂し、又宗門に絶對の價値を見出し、繼世其恩德に報ゆるの身となれるを感謝し奉る。

夏期傳道日割略定

六月中六日間　若松求道會
七月五日六日七日　名古屋講習會
同八日　海西郡東條
同九日より十五日まで　美濃高須講習會
同十七日　歸東
同二十一日より二十七日迄　讃岐國高松講習會
同二十八日二十九日　安藝竹原町
同三十日三十一日　同吳市青年會
八月一日より五日まで　福岡大學講習會
同已後　大隈、行橋、伊方、久留米、吉井、木屋、其他

かけひき心《二》

楠　秀　丸

所謂かけひき心を離れた天地を見出さぬ中はアツと落付て居れぬのてあります、こゝに來ると　私は思はず他力の信念が味はゝれるのてす、親鸞聖人が、南無阿彌陀佛は地獄へ行くタネか、極樂へ行くタネか知らぬ存ぜぬと仰せられたは、利劍即是彌陀名號て、他力の御呼聲の下に二十九年の自力分別の頭を斬られた御すがたと思へば、そこに何とも云へぬ尊い心が味はれるのてあります。善導大師が、我身は現に是罪惡生死の凡夫曠劫以來常に沒し常に流轉して出離の緣あることなしと仰せられた御言には何とも云へぬ親切が知られるのてあります。ワガミワワロキイタヅラモノトオモヒツメヨの蓮師の言は、平凡の樣に聞こえるが、この一言一呼吸の中に天地を一變させる味が偲ばるゝのてあります。されば、私共の樣な罪深ひ智慧の淺いものは人生究竟の解決になるとどうしても佛の呼び聲を聞かぬ中は、安心の態度が取れぬのてあります。而しながら解決とか安心と云ことは筆て書くとか口に云へば簡單てあるが人は境遇の變化と年齢の增すに從て心は複雜になり行くものて、胃病は食ひ足らぬ人よりは食ひ過た人に起るのてある。經論には菩薩が自力修行の道中七地の位に至れば七地沈空の難と云て、極端の空觀に陷り苦む相が說てある。他力の道中必ずしも沈空の難は無いが、前に云たかけひき心が種々無量のすがたとなりて、求道の精神を襲うて來るのてあります。かう思うたてこれて宜敷かとか、喜べぬがそれて宜敷かとか、たすけたまへとたのむと云言を聞けば　何だかかけひきの條件の樣に考へて行き、倫理以上と聞けば亦倫理が殺したくなり、そうてないと云へば王法を守らぬものは助からぬかとかけあひたくなり、感情てかけあい、意志てかけあい、理屈てないと理屈てかけあい、感情てないと感情てかけあひ、人格に轉すればあの人の樣になれませぬとなり、輿論に轉すれば現代の時勢はとヤリタクなり、形式てないと形式をつかみ、精神てあると精神をつかみ、千轉萬化微々細々引き被り〳〵打碎き〳〵する其下より出るものは矢張り目に見えぬかけひきこゝろて、そんな心は毛頭ないと云ふそれ自身がかけひきこゝろて出來て居る。《精神界》

澤柳政太郎先生序　曉烏敏先生著　本月廿日發行

最新刊

清澤先生の信仰

全一册　金七十錢　小包八錢　クロース綴

現代に指導者なしと云ふて居る者は釋尊を知らなんだカピラバストの人民と同じ愚を演じて居る者てある。清澤先生は現代の救主てある。清澤先生を窺はざる者は眼を閉ぢて世の闇を唱つ者てある。

本書は先生の高弟たる著者、先生の絶筆『我信念』を提げて、之を講ずるに先生の傳記と語錄を以てしたる著てある。先生を知らうと思ふ者は、本書によりて先生の髓に入るを得るてあらう。

東京振替巢鴨東京町二ノ三一三番　無我山房

清澤滿之先生七回忌記念講演

參聽隨意

六月五日午後一時府下巢鴨眞宗大學講堂に於て法會及感謝會

第一講演　六月六日午前九時
會場　九段佛教倶樂部
講師
眞宗大學教授　齋藤唯信先生
帝國大學教授　藤岡勝二先生
眞宗大學教授　住田智見先生
堤　鳳麟先生

第二講演　六月六日午後一時
會場　帝國大學法科教室
講師
文學博士　加藤弘之先生
法學博士　南條文雄先生
文學博士　澤柳政太郎先生
前文部次官　上田萬年先生
文學博士　吉田賢龍先生

第三講演　六月七日午後一時
會場　淺草本願寺廣間
講師
文學博士　村上專精先生
文學博士　近角常觀先生
眞宗大學教授　上杉文秀先生
眞宗大學教授　楠秀丸先生

浩々洞

曹洞宗大學講師 慶應義塾大學講師 忽滑谷快天先生著

東洋和尚傳

定價金五十錢
郵稅金八錢

本書は日本に於ては後醍醐天皇龜山天皇の聖帝より北條時頼北條時宗武田信玄上杉謙信前田利家楠正成等古今の名臣支那に於ては唐の太宗皇帝宋の太宗皇帝等の諸帝より黄山谷藤東坡白樂天張無盡裴休等の碩學が參禪せる佳話を載あ且つ和漢諸匠に關する逸話美談を合せて之に批評を加へ學道の正路を示し在家參禪の資糧に供する者にして讀者をして坐ながら古今の碩學と禪を酒量し名僧大德の鉗鎚に接するを得しむ。

第三高等學校教授文學士 富々村淳信先生著

此道人經典

定價金五十錢
郵稅金八錢

正にこれ新宗教論なり新道德論なり而してこれ質に人生問題最後の解決者なり世の靈と肉との機渦に悩めるもの知と信との衝突に苦しめるもの若しくは夫の舊宗教と舊道德とに厭けるものは進に來つてこゝに無上の安樂地を見出せ。◉附錄には二宮尊德翁の宗教論を批評す。

前文部次官文學士 澤柳政太郎先生著

國民教育

好評四版
定價金壹圓
郵稅金八錢

◉眞西周文明の調和を以て世界に對する日本の天職なりと自任する我國民の意氣精神即ち著者の胸ぜゆる新愛國心をうつし可たるかを說くものは本書也◉世を擧つて殺伐傲慢なる見識の超立を說き知るべしのは本書也◉乃ち本書は治修養を說ける治者にして高人逸生の指南車なることを

發行所 振替東京一七五番 東京市小石川區五軍町六六 東京市本郷區三丁目六番地 東京市小石川區五軍町六六 東京市本郷區三丁目六番地 雲山堂書店 東京市本郷區三丁目六番地 雲山堂書店

遺稿編纂
會編輯

上人 攝信 勤王護法錄

上製金六拾錢
並製金五拾五錢
各小包料八錢

◉本書內容(一)表題、梅園方竹先生の揮毫(四字は弘法大師、五字は聖武天皇の御筆格)(二)口繪、恩賜、七寶硯屏の圖、大津守衛の朝旨、同軍令、岩倉右大臣の書翰、上人の眞筆、同母公、伊達宗城侯、松平春岳侯、覺寶僧正、後金剛院、頓谷禪師、三國幽眠翁の眞蹟、新舊兩本堂圖の(三)前半は上人勤王の記事、後半は護法の記事、之れ先年火災の際、幸に黑烟の中より採り出したる上人御自筆の日誌數百卷によりて編成せしものなり。明治元年前後の政教の關係、宗教界の現狀、大教院の設置、教部省と各宗との關係、特に排佛毀釋論盛にして、佛教は實に危急存亡の有樣なりし、其の變遷を知るの政教日誌なり。御消息集二十餘通は、以て當時上人が如何に眞俗二諦に、御盡瘁せられしかを窺ふに足る、又日誌中詩歌あり修養談あり趣味津々(四)附錄として上人の逸事、又上人に對して、三上、南條、前田、大內、谷本、小栗栖、赤松、高楠、吉谷、鈴木、平井等の博士大家の所感談、錦上更に花を添へ近來教界の必讀要書なり。

發行所 振替口座東京四一一三番 京都市油小路前通上ル 興教書院

月刊雜誌

光

靈光第三年第五號目次(五月一日發行)

時論
◎願力の中に活く「石上歷」 ◎如何にして救ひを全ふすべきか「古賢」
講話
◎衣服に對しては此言を思へ……前田懸雲
◎八正道と五戒の實踐……高楠順次郎
修養
◎六字の聖號……清水智誠
◎俳句……橫山蜃樓
◎新聞機關……
◎次號の豫告◎神戸だより◎姬路だより◎哈爾賓だより◎讀者欄◎新刊紹介

△一ヶ月參錢五厘△半年貳拾錢△一ヶ年參拾六錢△海外一年參拾錢(郵稅共)
△切手代用一割增
△見本は往復はがきにて申込あれ
△十部以上には部數により割引すす
△振替貯金にて送金の節は口座料金貳錢每回添へられたし

發行所 神戸市中山手通四丁目 振替口座東京一〇五一〇番 靈光社
賣捌所 京都市御前通油小路 興教書院
東京市本郷春木町三丁目 森江書店
東京市本郷元富士町二番地 盛春堂

文學博士　前田慧雲著　●新刊●

修養漫話

定價金四十五錢
郵税金六錢

目次

●進一歩●心の獨立●學問の獨立●敎の權威●徹底したる修養●佛敎信仰の基礎●信仰の契機●信仰の活力●實業家の雅懷●短氣の療治●勤と儉●氣節の養成●誠忠●精神の鏡●娯樂に就て●功名の手と信心の手●緊的の觀念●未來的の思想●經驗の力●境界の異●予が苦學時代の經驗●人の知るとを求むる勿れ●小惡を愼め●志は樹立すべし●釋尊に對する余の感想●晩飯餘話●余が家の犬●精神上の傳染●修養と讀物●青年の元氣●氣慨ある壽司屋●喜時と怒時●名を後世に求めよ●俗見に陷る勿れ●眞物と贋物●趨勢を追ふ勿れ●永遠の廣告●不請の友となれ●古寺の堂守●祝詞に就て●余の三寶

發行所　東京市小石川區原町（振替貯金三七二八）　東洋大學出版部

東洋大學講師　境野黃洋講述

八宗綱要講義

東大寺藏、凝然大講像コロタイプ版口繪

佛敎各宗の敎義を概括して叙述したるもの古來凝然大德の八宗綱要に勝るものなし是を以て此書選述以來六百餘年研修の徒今に絶えず各宗學林の如き亦皆敎書參考の書とせざるはなし然れども其文簡にして義深く初學者容易に解すること能はず境野黃洋先生之を通俗平易に講述し以て學佛者の南針となす佛敎を研究せんとするものは先づ之を讀まざるべからず

特價壹圓六十錢

菊版六百五十頁
製本クロース美裝
定價金壹圓八十錢
小包郵送料金八錢

明治四十二年勞頭大出版

田淵靜緣師著　●布敎資料全集　四版定價金壹圓

新案說敎大家　田淵靜緣師立案

布敎大辭典

●布敎界空前絶後の新提供●

製本　堅六寸巾四寸三分　全文五號活字
平假名振假名付
總布クロース表金文字入
堅牢洋綴美裝　二千頁內外
定價金五圓

豫約價金參圓　郵税拾貳錢

●豫約期限　明治四十二年六月中

●期限經過後は定價に復す　●前金に非ざれは豫約と看做さず　●製本四十二年八月上旬より着金順により送本

進歩せる社會に必ず辭典ある軍隊に參謀あるが如し故に近來法律に屬する專門の辭典あり況や材料豐富なるべく、知識滿新なるべき布敎界、豈に辭典なかるべけんや新案布敎大家田淵靜緣師志を此に懷くこと年、拮据經營の餘、博く新古の良材を引き普く內外の事象を輯め尚も演說說敎等に參考し、其知識を研くべき網羅せられざるは世の識なし、悉くもの、進歩的布敎家、能く本書を座右に供へは、其知識日々〳〵新に、百般の疑問索めて解決せられざるはなく、必ずや敎壇に驅逐して百戰百勝すべき也

●新進布敎家必携の良顧問●

田淵靜緣師著　●佛敎各宗布敎大資林　再特價金壹圓　版郵税八錢

申込所　京都市東六條　電話座口二五七〇番　大阪二一八四番　法藏館

法藏館編　●佛敎大家名說全集　壹圓貳拾錢

近角常觀校訂

冠頭 歎異鈔

第三版

定價五錢、郵税四冊迄貳錢、施本用小冊子

此の『歎異鈔』は聖人の遺教を世に普からしめんが爲め、施本用小冊子として出版せるものにて、讀み易きやう字をまばらに植ゑ、校正を嚴密になし、且つ冠頭を加へて諸聖教中より參照すべき文を引用し、親切に作りたるものなり。教家諸君の御一顧を俟つ。

近角常觀著

信仰之餘瀝要略

初版

部數ニ應シ充分割引ス

定價五錢、郵税四冊迄貳錢、施本用小冊子

本書は某師の勸誘により、有志諸君が傳道求道の資に供せんが爲に『信仰之餘瀝』中の眼目「宗教的同朋」「活ける懺悔」「信界に於ける監獄」以下二章を拔萃し、傳道用小冊子として印刷したるものなり。有志諸君の御試用を切望す。

發行所 東京市本郷區森川町一番地 振替口座東京一六六九六番 求道發行所

明治四十二年四月二十七日印刷
明治四十二年五月一日發行

發行兼編輯人 近角常觀
印刷人 白土幸力
東京市本郷區森川町一番地
發行所 求道發行所
（振替口座東京一六六九六番）

東京市神田區表神保町
大賣捌所 東京堂

規定

一 本誌は毎月一回一日發行とす
一 本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
一 本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、但し其節には登記料金貳錢必ず御加算を請ふ
一 郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事
一 郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事
一 凡て送金受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし
一 本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
一 回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべし事
一 本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵税一冊に付五厘
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	

●廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

近角常觀著作

信仰之餘瀝

第拾版
袖珍美本
郵税定價四錢

本書は某師の勸誘により、有志諸君が傳道求道の資に供せんが爲に『信仰之餘瀝』中の眼目「宗教的同朋」「活ける懺悔」「信界に於ける監獄」以下二章を拔萃し、傳道用小冊子として印刷したるものなり。有志諸君の御試用を切望す。

懺悔正信の道

第貳版
袖珍美本
郵税定價四錢

本書は某師の勸誘により、有志諸君が傳道求道の資に供せんが爲に『信仰之餘瀝』中の眼目「宗教的同朋」「活ける懺悔」「信界に於ける監獄」以下二章を拔萃し、傳道用小冊子として印刷したるものなり。有志諸君の御試用を切望す。

懺悔正信の道

第貳版
袖珍美本
郵税定價四錢

本書は某師の勸誘により、有志諸君が傳道求道の資に供せんが爲に『信仰之餘瀝』中の眼目「宗教的同朋」「活ける懺悔」「信界に於ける監獄」以下二章を拔萃し、傳道用小冊子として印刷したるものなり。有志諸君の御試用を切望す。

人生と信仰

第貳版
袖珍美本
郵税定價四錢

本書は某師の勸誘により、有志諸君が傳道求道の資に供せんが爲に『信仰之餘瀝』中の眼目「宗教的同朋」「活ける懺悔」「信界に於ける監獄」以下二章を拔萃し、傳道用小冊子として印刷したるものなり。有志諸君の御試用を切望す。

歎異鈔

第五版
袖珍美本
郵税定價四錢

本書は某師の勸誘により、有志諸君が傳道求道の資に供せんが爲に『信仰之餘瀝』中の眼目「宗教的同朋」「活ける懺悔」「信界に於ける監獄」以下二章を拔萃し、傳道用小冊子として印刷したるものなり。有志諸君の御試用を切望す。

求道發行所
東京市本郷區森川町一番地
振替口座東京一六六九六番

前號要目

求道

◎如來の御心　自督

◎煩惱惡業と御方便　講話　近角常觀

◎本願の眞意　聖傳

◎デヤータカ釋尊傳
第二十　良馬の話
第二十一　良き戰馬の話
第二十二　淺瀬に於ける馬

告白

◎家庭問題より信仰に入る　都築百太郎

◎一人のためなりけり　講義　園千鶴子

◎歎異鈔　第十二章　近角常觀

喚聲

◎うれしき舟路《長詩》　增田八風

◎たから《同》　同

◎天に《同》　三井甲之

◎適應《同》　同

時報

◎尼崎傳道

求道第六卷第五號　明治四十年十一月十二日第三種郵便物認可　明治四十二年五月一日發行（毎月一回一日發行）

東京市神田區淡路町二丁目一番地　三光堂印刷